

2024.9

秋冬

No.119

思文閣出版

鴨東通信



エッセイ

❖ 日常語のなかの歴史 32
おおばんふるまい【大盤振舞】◆桃崎有一郎
❖ てーたいむ
民衆史を基軸に全体史を構想する
◆上川通夫

日本中世における「東海」地域の一体性
とその特質
◆水野智之

徳川幕臣団と江戸の金融システム
◆末岡照啓

床の間に好適な一幅とは

—雑誌『美濃界』を読む—

◆多田羅多起子

謎の国王と髭の関係
◆平川信幸

❖ ミレニアル世代の研究レシビ 6

マンガの夢、テクノロジーの夢
◆陰山涼

❖ 史料探訪 80

高山彦九郎遺墨
◆上嶋悟史

藤井讓治編

織豊期主要人物 居所集成 〔増補第3版〕

10月刊行予定

B5判上製・六三〇頁／定価 八、八〇〇円

二〇一六年の第2版刊行から、約8年。織豊期の重要人物たちは何時何処で何をしていたのか、数多の研究者が調べ上げ集成した基礎資料を、ついに第3版として大幅アップデート。

居所の確定は、従来個々の研究者が、特定の人物、特定の時期に限って行ってきたため不完全で、公にされることもきわめて少なかった。本書は、主要人物の現在知りうる限りの居所の情報を編年でまとめた研究者必携の書！ 第3版では従来の25名に加え、新たに松平家忠、徳川秀忠、宇喜多秀家、前田玄以、増田長盛、長束正家、島津義久、島津義弘、立花宗茂の9名を加え、豊臣政権の五奉行・五大老を完備した。



【目次】（★は第3版で追加した人物）

織田信長の居所と行動	（堀 新）
★豊田秀吉の居所と行動（天正十年六月二日以 前）	（堀 新）
★豊田秀吉の居所と行動（天正十年六月以降）	（堀 新）
★豊臣秀次の居所と行動	（堀 新）
★徳川家康の居所と行動（天正十年六月以降）	（堀 新）
★松平家忠の居所と行動	（堀 新）
★徳川秀忠の居所と行動	（堀 新）
★足利義昭の居所と行動	（堀 新）
★柴田勝家の居所と行動	（堀 新）
★丹羽長秀の居所と行動	（堀 新）
★明智光秀の居所と行動	（堀 新）
★細川藤孝の居所と行動	（堀 新）
★前田利家の居所と行動	（堀 新）
★宇喜多秀家の居所と行動	（堀 新）

上杉景勝の居所と行動	（堀 新）
★毛利輝元の居所と行動（慶長五年九月一四日 以前）	（堀 新）
★毛利輝元の居所と行動（慶長五年九月一五日 以降）	（堀 新）
★小早川隆景の居所と行動	（堀 新）
★前田玄以の居所と行動	（堀 新）
★石田三成の居所と行動	（堀 新）
★浅野長政の居所と行動	（堀 新）
★増田長盛の居所と行動	（堀 新）
★長束正家の居所と行動	（堀 新）
★片桐且元の居所と行動	（堀 新）
★福島正則の居所と行動	（堀 新）
★伊達政宗の居所と行動	（堀 新）
★島津義久の居所と行動	（堀 新）
★島津義弘の居所と行動	（堀 新）
★立花宗茂の居所と行動	（堀 新）
★近衛前久の居所と行動	（堀 新）
★近衛信尹の居所と行動	（堀 新）
★西笑承兌の居所と行動	（堀 新）
★大政所の居所と行動	（堀 新）
★北政所（高臺院）の居所と行動	（堀 新）
★浅井茶々の居所と行動	（堀 新）
★孝蔵主の居所と行動	（堀 新）

表示価格は税込

日常語の
なかの歴史 32

日常語のなかで、

歴史的語源や

エピソードを取り上げ、

研究者が専門的視野から

ご紹介します。

おおばんぶるまい

大盤振舞

人に気前よくご馳走や祝儀を与えることを「大盤振舞」という。実は「大盤」は当て字で、元来は「坑飯」と書いた。「坑」は「椀」の異体字だ。今のラーメンの丼ほどもあるお椀に、器の深さの数倍もの高さに山盛りにした米飯を坑飯といった。

かつて鎌倉幕府では、これを中心に豪勢な食材が振る舞われ、最も重要な儀礼とされた。鎌倉幕府の史書『吾妻鏡』では「坑飯を献ず」と書かれたため、

専門家の誰

もがこれを

將軍への貢

ぎ物と信じ、

御家人が

將軍に忠誠心を表明し直す服属儀礼」と信じてきた。

しかし、その源流となった平安時代の坑飯は、延臣が同輩たちを饗応する共食行事だった。鎌倉幕府の坑飯も、全御家人が將軍御所の庭に設けた座席で坑飯を共食する行事だ。上下関係ではなく、同じ主人を戴く同輩同士が、横方向の結束を固め直す儀礼だったと考えるほかない。それは幕府の最も重要な節目（源頼朝の鎌倉入り、年始、將軍の代替わり）で行わ

れ、したがって幕府の本質と直結している。本質とは、〈幕府は御家人の横の連帯を根幹とする同業者組合である〉ことだ。

江戸時代には、農村・町で正月に一家の主が親類縁者をことごとく呼び集め、豪勢な酒食を与える行事を「大盤振舞」といった。享保一七年（一七三二）の『昔昔物語』によれば、年始のそれを機に疎遠だった親類同士が仲を深め、年頃の男女の縁談や、誰かの古びた家の普請を検討することに意義があったという。主人が下僕に偉ぶって君臨することではなく、主人のもとに同僚（仲間）が再結束して全体として生き残ろうとすることに主眼があった、鎌倉幕府坑飯の趣旨がよく残っていたといえよう。

現代では、政府の現金バラマキ政策が「大盤振舞」と報じられるが、それが国民の横の結束を強めることとはない。同じテーブルで面と向かって共食してこそ、財布の紐を緩めて大盤振舞した価値があるのに。政治家は、政治家同士や支援者との会食でそれを知っているはずなのだ。

（桃崎有一郎・武蔵大学人文学部教授）

てーたいむ

民衆史を基軸に全体史を構想する

かみ かわ みち お
上川通夫

(愛知県立大学教授)

近刊の『民衆仏教の形成と日本中世』では、日本中世民衆思想史へのアプローチとして、民衆仏教の萌芽を探る試みをされています。今回は、その構想と現在地をおうかがいたします。

■民衆史へのあこがれ

——先生のこれまでのご研究からは、民衆史にご関心をお持ちだという印象がありませんでした。いま、中世史の学界で決して研究の主流になっているとは思われないテーマに、あえて取り組もうと考えられた経緯から教えてください。

私は大上段に考える癖があつて、自分がやっている日本中世史研究の“存在理由”を説明できないといけないと考えています。それは学術の世界だけではなく、現代社会との関係でも意味があ

るといえる研究をしたい。そう考えた時に、自分の納得のいく研究対象はなんだろうかとは、もう散々考えました。研究を始めたころは、できそうな研究対象に手をつけ、まずは論文が書けてよかったという程度でしたが、三〇代後半から四〇代のころは毎日それを考えていました。

私が一九八〇年に大学へ入学した時は、戦後歴史学を担ってこられた一九三〇年前後生まれの先人研究者が大活躍されていた時期で、その話の中で印象に残るのは民衆史研究でした。ただ当時の自分には着手できなかったのですが、ずっと気になっていました。大先輩たちの民衆史研究と、自分ができそうだと、やりたいと思うこととの接点が見えてきたのは、五〇歳ごろからです。

「民衆」といっても、一枚岩ではないですし、その内部に階層や

排除・差別、それから争いもありますから、無条件に肯定的な存在だと思っているわけではありません。とはいえ、権力の側ではない人々が、どうやって精一杯生きて現代まで人類の歴史を繋げてきたかを歴史学的に復元しつつ、その研究をする意味を説明したい、そんな願望を持っているのです。

——若いころに影響を受けたのはどなたでしたか？

入学した立命館大学で習った中世史の先生は、三浦圭一先生と杉橋隆夫先生です。三浦先生は一九二九年のお生まれで、民衆史・民衆生活史がご専門でした。三浦先生の研究については、大学生のころの私には、よくわかっていなかったのですが、年々重たくなってきて、今に至るといふ存在です。

他にも身近な関西の研究者には民衆史を引っ張る方がたくさんおられました。それから、三省堂から『日本民衆の歴史』、東京大学出版会から『一揆』というシリーズが出版されました。民衆史の成果が目に見えて出てきたのが、七〇年代後半から八〇年代でした。八〇年代ぐらいからは、社会史も出てきますけれども、今考えればそれにも影響を受けていたなと感じます。

ただ、社会史研究では、民衆だけじゃなくて、あらゆる身分の人たちのいろいろなものが研究対象になっていました。さまざま史料を使って豊かに多様な世界を描き始めたと思いますが、一方で、後から振り返ると、問題意識や歴史像の分散化傾向も強くなったという風に思います。

今回論文集を編んでいく過程で考えたのは、民衆史を基軸にして、中世史全体を考えるとということでした。

——「民衆史を基軸にする」というのはどういうことですか？

研究対象の中心は被支配身分です。史料は少ないですけど、そこを一番の研究対象にしながら、周りの世界と切り離すのではなくて民衆生活の次元から、政治とか、社会の仕組みだとか、大きく言えば国際世界とか、そういう全体と関連していると考えられるわけです。もちろん、政治の側から眺めることも、社会の構成から民衆史の位置を見ることができるとは思いますが、そうではなくて、民衆史を基軸に全体を見てみたいということなんです。

それは私が考えたことではなくて、黒田俊雄さんが、『中世民衆の世界』（三省堂、一九八八年）の中で近いことをおっしゃっています。でも、この議論はあまり引き継がれませんでした。

■研究のあゆみ

——研究史上に提言はあったけれども深められなかったテーマ、そして自分でも若いころから気になっていたテーマに、いよいよ取り組んでみようと思われたのですか？

私は京都で勉強を始めたという環境もあって、中世寺院研究から出発したんです。平安後期の東寺が最初の研究対象でした。しばらくは権門・寺院の研究をしていました。黒田俊雄さんの権門体制論、顕密体制論を共有している空気が、関西にはあったものですから、中世国家とか、中世の天皇とか、そういう次元での研究を最初はやっていました。三浦先生のお話や本に惹かれる一方で、自分で研究したのは国家や天皇との関係での寺院史でした。今から振り返ると、これが私の研究の第一段階です。



上川氏

自分で傾向が変わって
きたなと感じたのは、一
九九〇年代の終わりぐら
いからです。立命館大学
には古代史研究者の山尾
幸久先生がおられて、入
学以来決定的な影響を受
けました。古代史では早
くから東アジアという視
野で考えられています。

どうして中世史で外から
見るっていうことをやらないんだろうっていうことを考えたので
す。中世史、近世史は八〇年代後半に東アジア世界論の成果が出
てきます。私もようやく、一九九〇年代の終わりぐらいいから、一
〇世紀から一二世紀ぐらいの中世仏教成立史は東アジアの中で見
ないと解けない、と思うようになりました。それは同時に、中世
社会成立史の問題だとも気づきました。近世や近代の成立にはな
くて、中世成立史にある固有の要素は、仏教を組み込んだって
いうところだと思ったのです。仏教は外来宗教ですから、中世の成
立は国際環境なしにはあり得ないことだ、と分かってきたの
が九〇年代の終わりころでした。

そして、私が依拠してきた黒田俊雄さんの権門体制論、顕密体
制論に、東アジア世界の中で、中世仏教や中世の成立そのものを
問うってという視点が欠けていることに気がきました。国内問題

として構想されているものですから。そのような考えから、顕密
体制論も見直す必要があるというふうには、研究内在的に気がつ
いたんです。そこが説明されると、もっと豊かになる学説だと思
いました。これが第二段階です。

自分では意識していないですが、もしかしたら冷戦構造が終わ
り、そこから一〇年ぐらいの間に、現実認識を変更せざるを得な
かった九〇年代の環境が、国際社会の中に日本中世史を位置づけ
る視点を要請していた可能性もあると思います。

■研究の第三段階へ

一方で、自分の研究はこれで本当にいいのかとも悩み続けてい
ました。権力者が造営した寺院とか、外国から導入した仏教とか、
国家との関係で築かれていたものが、列島の生活者にどういう意
味を持ったのかということ、考えないといけない、民衆生活史
との接点を見つけない、と思いました。で、少しずつ手がかりを
見つけられ始めたのが、二〇一〇年代ぐらいです。二〇一二年に
『日本中世仏教と東アジア世界』（塙書房）を出版したのですが、三
部構成の第三部で地域社会について書いています。これからやる
べきことに気がつき始めたころだったので。

このころから、民衆生活の中での仏教を見直すことで、中世史研
究の存在理由を自分自身が納得できるように説明できるかもしれ
ないと考ええるようになりました。

何十年もかかりましたけど、ようやく最初にやりたかったこと
をやり始めたっていう感じです。ですから、学会で古くからお付

き合いのある方々の多くは、私がそういうことに関心を持っていたとはご存じないような気がします。

今の関心は、日本列島と東アジア世界とが関連する歴史の痕跡を、民衆生活や民衆思想の中に見出していくことです。政治レベルでは当然なのですけれど、民衆の生活次元でもその枠組みが決定的に意味を持っていると思っています。さらにかなりこれは背伸びですけど、仏教ですから、東アジアにとどまらず南アジアまで視野に収める必要があります。

まだまだ実証が必要なのですが、これは仏教史だから見えてきたところがあるのです。南アジアの釈迦、中央アジア、シルクロード、東アジア、日本列島というのは、間接的には間違いない繋がっています。それが歴史的に意味のある繋がりであるのかどうかは、文献史学として証明しないといけないですから、簡単に説得できるとは思わないのですけど、挑んでみたい。しかも列島民衆の生活次元で、なんとか痕跡を見つけないかという思いです。

中世の民衆は、基本的には日常生活で精一杯だったと思います。ただ、民衆の毎日の生活の認識の中では、仏教の要素を通じて、外の世界が少し見えていたのではないかと考えています。例えば文献では、自分たちの村に寺があって、これは仏教世界の一部分だということを書いた史料が結構出てきます。日本を越えて、インドとかも含めた人間世界の一部であり、さらに人間世界を超えた仏教世界があるということ、知識としては持っていたわけですね。みんながいつも意識していたわけではなくても。

村井章介さんは早い時期に、中世の貨幣(銭)と陶磁器は民衆生活の深みに世界史がある証拠だと言われていました。なぜなら貨幣は日本では作っていませんでした。また陶磁器は中国産がモデルになっていた、西アジアでも同じ形があったりします。それは私にとってすごく大事なヒントで、他にも探せばたくさん要素があるだろうと思いました。たとえば文字は決定的です。漢字と漢文体を使いますから。

中世の実態は、列島の中で閉じてはいなくて、純粹日本文化の伝統というような発想では明らかにし得ないのだと思います。そして、貨幣、陶磁器、文字と並んで固有の意味を持つ世界史要素が、仏教だと思うのです。

日本中世仏教史研究には、分厚い蓄積がありますし、仏教が日本発祥ではないということは、誰でも知っていますけれど、発想としては、いかに日本化したかとか、いかに日本仏教として成立したかとか、仏教の中に「日本」を見出そうという視点が、研究者の中にも強いと感じます。日本仏教成立史みたい論じてしまう傾向です。でもそもそも、外国要素がずっと残っていることに意味があって、もちろん、日本的にアレンジされていきますけれど、中世史の問題として、世界的視野で日本列島史を見るために、仏教は外せない要素だと思います。

■支配者の「民衆仏教」、民衆の「民衆仏教」

中世の民衆仏教は、基本的には民衆を支配する側の思想としての顕密仏教なんです。それは、黒田俊雄さんが、国家の支配イデ

オロギーである顕密仏教を民衆が受け入れている、荘園制を通じて、支配思想としての顕密仏教が民衆世界に浸透していると枠組みを示されています。そしてこれには、平雅行さんの整合的で、説得的な説明があります。これが中世仏教の正体です。そのことを前提に私は考えないといけないくて、民衆が仏教を身近に信じたりお祈りをしたりしているからと言って、これを自律的な民衆思想だとは言えないのです。

仏教を信じることによって、領主に年貢を出しますと誓うとか、年貢を出さないと地獄に落ちるつていう、そういう思想の受容者になつてしまう場面が大多数だというのは、間違いないんです。私がおもうとしている民衆仏教とか民衆思想というのは、そういう支配思想と違う次元で、仏教に価値を見出してくる庶民の姿を捉える試みのことです。

—— 具体的には、どのように見出していくのでしょうか？

文献史学ですから、もちろん史料の中からです。例えば中世の書記言語のなかでは不殺生、慈悲、和合、智慧、布施、旦那、人間、もうあらゆる仏教用語がありますけど、それらも顕密仏教の一部分なので、支配思想としてよく使われます。領主が慈悲を持って荘園の民を統治するんだとか。ただ、民衆自身が書いた申状や起請文、願文などの中にこれらの仏教用語が出てきて、その史料を歴史的文脈の中で解釈したときに、これは支配に抗う民衆の自己主張なのではないかと判断できることがあるのです。

たとえば「不殺生」という言葉は実質的な意味は非暴力での抵抗を意味していたり、「和合」は平和の形成に近い意味だったり、

マイノリティーが生活に追い込まれたり、必死で生きる時の自己主張として絞り出された言葉には、近代の日本語だと別に翻訳できそうなものがあると思うのです。もうすでに支配思想として仏教が中世に定着していたものですから、普遍的な、本当に生活の中から見出した価値観を、なんとか表現しようという時に、仏教思想・仏教用語に借りる形で表現したという場面が、確かにあると思うのです。

ただ、これを証明できる古文書、古記録は本当に少ないです。歴史上に痕跡が残るためには、自分たちの主張を文字で書かないといけないですよ。多くの場合それは漢字と漢文だつていう制約があります。それに、百姓が領主に提出する申状とか起請文は、様式が決められています。それは領主が決めた様式で、それを逸脱していると受け取ってもらえません。漢字、漢文で書いて、様式を守つて、それで、自分たちの意思をなんとか表現するつていうのは、もう何重にも制約のある中で発言しているということなので、そうした中で一つでも痕跡があると、とても大きな意味がある。ですから、断片から全体を復元するという方法を持たないといけないと思います。

愛知県にはもう三一年いるんですけど、地域の歴史を研究したり、史料調査に行ったりする機会がときどきあります。最初にこうしたことに気づいたのは、今の豊橋市の普門寺というお寺に伝わる一二世紀の珍しい、板に書いた約束事の史料の中でした。それは地域で作ったに違いないものでした。そこには不殺生、和合、慈悲とか難しい仏教用語がわざわざ書かれているのですけど、ど

うも地域の願望として発信しなかったことではないかと思っただです。これは、長くここに住んで、地元の歴史を調べる過程で出会ったありがたい史料でした。

それらを実感として見ながら、一九八〇年代ぐらまでの研究者の民衆史研究などを見直すと、三浦圭一さん、横井清さん、脇田晴子さん、河音能平さん、黒川直則さん、網野善彦さん、黒田俊雄さんたちが見ようとしていたのは、もしかしたら苦渋や辛さをついて抱えながらもなんとか将来を前向きに生きていこうとしていた民衆世界だったのかなと思うようになったのです。愛知県で出会った地域の史料そのものから学んだことと、かつての研究者の方々の研究とを繋げて、自分なりの研究ができるかもしれないと思います。

■中世仏教史の現在の意義

——先生はそうした中世の民衆の声を、仏教を通じて拾っていく作業の現在の意義を強く意識しておられますね。

授業をしていて学部生でも知っている仏教用語というところ、殺生とか、慈悲でしようか。みんな知っているんですけど仏教用語だっというところを、いまはそれほど意識していませんよね。それぐらい日本語として定着してゐるんです。思想がどれぐらい定着しているかはちょっと難しいですけど、中世があったからこそ、そういう言葉がいまもあるのかなと思います。この、中世に気づかれ始めたものが、社会を動かすぐらい組織化されて、力を持って、世の中をよくできているかというと、甚だ疑問で、実現していない

理想といえます。

中世仏教の研究をしていて思うことは、仏教に外来性があるというの、決してマイナスイメージではないということです。仏教は中世にも支配イデオロギーとしてかなり使われましたけど、部分的には普遍的な生きる価値みたいなものが含まれていて、それは間接的に南アジアから長い時間をかけて導入されて、日本では少なくとも言葉としては定着している。今ではもう仏教の形は取っていません、日本の場合、例えば人権とか平和とか自由とか、そういう近代の言葉で言われる価値に引き継がれていると考えられるのです。

学生の教育実習を見に行つて知つたのですが、高校の「歴史総合」は、アメリカの独立宣言、パリ不戦条約、そして国連憲章、日本国憲法、それらに思想的な継承関係があつて、世界の普遍的な人類の英知がどう繋がり、今どこまで実現していて、どういう限界があるかについて考える仕組みになつてゐます。ただ、「歴史総合」や、あるいは最近のグローバルヒストリーというのは、主に近代史でやる傾向が強いんですね。私は、前近代からそれを繋げて、歴史認識を持つた方がいいと思つてゐます。平和とか非暴力という言葉は、まだ実現していないけれど、今後それを実現していくための手がかりを、西欧近代知に触れる以前の日本中世の民衆に見つけてみたい。いかにも大風呂敷で、大背伸びなんですよ。だから自分の構想を実証していく作業を、一生かけて背負わないといけないという覚悟です。

日本中世における

「東海」地域の一体性とその特質

水野智之 みずの ともゆき

このたび、中世史研究会編『日本中世の東西と都鄙——中世史研究会五〇周年大会論集』が刊行された。本書は二〇二二年九月・二三年九月の二回にわたって行われた同研究会の五〇周年大会シンポジウムの研究報告および討論内容を収録したものである。初年度には「列島の東西の社会構造とその変質」として、東国と西国とよばれる地域の社会構造について、第二年度には「都鄙の連関と相互認識」として、都鄙の関係性や相互認識のあり方について扱った。これらの視角に基づく考察から中世の列島社会の特質にせまった論文集である。拙稿「『東海』地域の成立と京・関東」は、中世の「東海」地域のあり様を見通すことによつて、これまでの中世の東西論や都鄙論を再考したものであり、第二年度の報告として本書第Ⅱ部に収録された。この考察で得られた知見をもとに、「東海」地域の研究状況やその一体性について触れてみたい。

中世史研究において、東国と西国の社会像はよく認識されてきた。これは網野善彦『東と西の語る日本の歴史』（そして、一九八

二年）の成果が大きい。東国は弓矢・馬による騎射型武者が成長し、家父長制的・主従的な関係が強く及んだ社会であったのに対し、西国は海と船による海賊的な武者が成長し、座のような横に連帯した関係が強く及ぶ社会であったという。それぞれの社会の歴史的経緯、特徴が詳述されていて興味深いが、日本の社会を東国的、西国的と大きく整理したため、その範疇で十分に説明されない地域や東西の文化・特徴がいずれもみられる地域をどのように捉えるかという課題が残されたとも言えよう。のちに網野氏は『日本社会の歴史（上・中）・（下）』（岩波書店、一九九七年）で列島の各地域について叙述されたが、北海道、東北、関東、東海、北陸、畿内、中国、四国、九州、沖縄など、列島の各地域を対象とした研究状況には差があるように感じられる。

このうち、東海は中世史の分析対象として積極的に取り上げられてこなかったように思われる。なぜ東海地域から天下人が輩出したのかといった関心は以前より高かったが、それ以外の時代で東海地域を一体的に捉えて分析する機会はまだ多くなかったの

ではないか。これまで東海は、京と鎌倉の中間地域として東・西のいずれの特徴も見られると語られてきた。確かにその通りであるが、これだけでは東海の地域的な特質が十分に解明されたとは言いがたい。二〇一二年に中世史研究会では、設立四〇周年の大会シンポジウムを開催した。ここでは「日本中世史のなかの東海地域」というテーマのもと、従来のような一地域史の議論にとどまるものではなく、積極的に全体史の再考を試みる企画が催されたこれにより、中世史研究における東海を分析対象とする認識は少しずつ高められ、最近では、『東海の中世史』全五巻（吉川弘文館、二〇一四年）といった書籍も刊行されるようになった。東海では伊勢湾・三河湾の内海、さらに関東とつながる太平洋上の交通・流通が非常に活発であったこと、京・鎌倉往還が他の街道に比してよく利用され、整備されていたことが注目されつつある。

ところで、現在、東海地域の範囲をめぐっては、認識の違いが見られる。愛知・岐阜・三重県の三県を指す場合もあれば、愛知・岐阜・三重・静岡県の四県を指す場合もある。そもそも古代の東海道という行政区分に基づく設定地域や認識は中世にも確かめられ、現在の「東海」の認識は、中世の人々にどの程度、認識されていたのか明らかにされていない。美濃、つまり現在の岐阜県の一部は東山道に属している。そのため、拙稿では「東海」地域という認識やその領域で一体的な地域権力が確かめられるのかどうかを課題とした。

そして、東海道の領域から鎌倉幕府が成立して、鎌倉を中心に幕府が支配を強める領域として「関東」の認識が広まり、これに

より東海道の領域から「関東」を除いた西の地域が「東海」として認識されるようになったのではないかと推察した。ただし、江戸時代においても「関東」を三関の東域とする本来の認識や、古代の東海道の地域区分に基づく認識も見受けられるので、現在の「東海」という認識の成立・定着は、近代・現代のことであろう。

では、中世において、「東海」地域の政治的な一体性を高めた時期はなかったかと言えば、そうではないと考える。南北朝期には、美濃・尾張、のちに伊勢国も加わる土岐氏の領国と、三河・遠江・駿河国といった足利一門の守護を通じた足利尊氏・義詮の地域支配のあり様から、「東海」地域の一体性が鎌倉時代までもり強く認識されたと思われる（東海地域成立の第一段階）。さらに、桶狭間の戦い後、永祿四年（一五六二）五月までに織田信長は松平元康（のちの家康）と同盟し、「東海」地域の一体性は再び強まったと見なされる（東海地域成立の第二段階）。以上の詳細は拙稿によるが、東海地域に展開する強力な政治権力の成立は、東西論のみならず、京や鎌倉・江戸など都鄙をめぐる全体史の中で改めて注目すべきことと思われる。織豊期から江戸初期に東海地域の有力武士が各地に転出したことの歴史的意義や、天下人がこの地域に首都を置かなかった理由も全体史と東海地域の検討から探るべきである。

中世史研究会は、東海地域を拠点として、これまで東・西の多くの地域から研究者が集まってきた。地元で生まれ育った研究者も、ともに研究を進めてきた。中世史研究会の会員として、東海地域の研究とともに、全体史の深化、発展に寄与できる学会であり続けられるように願ひ、かつ努力する次第である。（中部大学人文学部教授）

徳川幕臣団と江戸の金融システム

末岡照啓 すえ おか てる あき

「勝てば官軍、負ければ賊軍」とよくいわれる。勝者の歴史が語り継がれ、敗者の歴史が埋没する所以である。西南雄藩が設立した明治政府は、徳川幕府の所領と幕臣団である旗本・御家人の家禄（知行地と俸禄米）を没収した。例外として、徳川宗家の静岡藩移住にしたがう者や、新政府の朝臣となった者は禄を保証されたが、それも大幅な減額はまぬがれなかった。他方、明治四年（一八七二）の廃藩置県にとりもなう藩債処理では、一万石以上の大名の債務は藩債として新政府に肩代わりされたが、一万石未満の旗本・御家人の債務は肩代わりされなかった。それゆえ、西南雄藩を取引相手とする大坂商人にくらべ、徳川幕臣団を相手とした江戸商人の損失ははるかに大きかった。そのためか、研究史上、近世の金融史といえは上方が重視され、江戸のそれは軽視されてきたきらいがある。

さて、徳川幕臣団の旗本・御家人は、知行地を与えられ農民から年貢を徴収する地方取と、幕府から春夏冬の三季に俸禄米金（サラリー）を支給される蔵米取に分かれた。蔵米取は幕臣団総数約二万二五〇〇人のうちの二万人（八二％）を占め、残りの二五〇〇人

ほどが地方取であった（近世中期）。しかも、幕府財政支出の約四五％が蔵米取幕臣団へ支給される俸禄米であり（幕末期）、彼らの存在は幕府財政を左右した。彼らの個々のサラリーは少なかったとはいえ、政権を支える官僚なので、幕府はたえず彼らの家計維持に腐心した。

享保九年（一七二四）、幕府は享保改革のデフレ政策のなかで苦境にあえぐ二万人もの蔵米取幕臣団の家計を安定させるため、浅草米蔵近辺に居住する商人一〇九人を札差仲間（ふだち）に任命した。札差の名は、もともと御蔵役所前の蓑苞（わらうと）に蔵米取の名前を記した札を差して俸禄米の受取の順番を待ったことに由来する。

蔵米取の旗本らは、生活のために俸禄米を貨幣に換える必要があった。札差は、彼らの俸禄米（サラリー）の受取りと換金を代行し、それを担保とする金融（貸付け）もおこなった。幕府は札差仲間の認可を機に、札差に蔵米取の家計全般の世話（かってまかぬ業務）を依頼したのである。

蔵米取は、札差から俸禄米を担保に家計費を前借りすると、その依頼書の「御蔵札差頼証文」（おくらふだちしたのみしょうもん）と返済契約書の「対談取極証

文」を提出した。筆者はこれまでに、住友家文書の中から蔵米取の旗本約二〇〇人分の札差証文を採集し、『住友史料叢書 札差証文（二）（三）』として思文閣出版から刊行した。同叢書には札差泉屋甚左衛門店の経営記録『浅草米店万控帳（上）』『同（下）（続）ほか』も翻刻した。

このたび、これらの史料を駆使した拙著『徳川幕臣団と江戸の金融史——札差・両替商の研究』（思文閣出版）では、札差の金融システムを明らかにしたが、これはちょうど現在のサラリーマン（俸給生活者）が、銀行など金融機関からサラリーを元手に住宅ローンを組むのと似ている。札差は俸禄米の担保ローン金融によって莫大な富を築いたのである。

札差の繁栄と逆行するように蔵米取は札差からの借金がかさみ困窮したので、幕府はこれを打開するため、蔵米取の救済策として、その貸出金利の引き下げや、債権破棄を断行した。これが高等学校教科書で学習する寛政元年（一七八九）の棄捐令（借金棒引き令）なのである。その後もうこうした弾圧を受けながら札差は幕末まで生き延びている。それは蔵米取の旗本が札差に勝手賄い業務を依頼し、担保として俸禄米を渡しているからである。いわば蔵米取と札差は共生関係にあり、幕府はその金融システムを崩壊させないため、棄捐令と引き換えにただちに札差救済金の貸付機関（猿屋町会所）を設置して緊急融資した。

地方取の旗本もまた、知行所の村々から年貢米金を知行地の名主・在郷商人・都市の両替商などに渡して生活全般の勝手賄いを依頼したが、借金がかさんでいくのは同様であった。幕府もその

窮状を認め、文化一四年（一八一七）に大名や地方取旗本を救済するための低金利の貸付機関（馬喰町貸付役所）を設置し、幕府公金を融資した。ちょうど、平成一〇年（一九九八）に日本政府がバブル崩壊後の金融システムを守るため、公的資金を銀行に緊急融資したことと共通する。

ところで、現在のサラリーマンにとって、金利の変動は生活に切実な影響を与えるので、ローンの借り替えや元金の繰上げ返済によって金利負担を減らしているが、旗本ら蔵米取幕臣団も同様であった。とはいえ、権力に守られた江戸時代の蔵米取は、元金を完済する意思がなく、証文の書替や長期の年賦返済で免れようとした。札差もそれを見込み、貸出金利は寛政の棄捐令まで年利二〇％以上と長年高利であった。利息収入で元金分まで早期に回収したのである。だがやがて貸出金利は棄捐令によって年利一二％、幕末期には一〇％にまで引き下げられ、往時の繁栄は望めなくなっていくた。

以上、江戸には二万人以上の蔵米取幕臣団があり、蔵米が支給されるたびに多数の札差証文が発給されていた。江戸には江戸に見合った金融システムが存在していたのである。近年の大坂両替商研究を見るにつけ、研究の組上にのらない江戸の金融システムについて再評価する時期がきていると痛感する。

（住友史料館研究顧問）

床の間に好適な一幅とは

——雑誌『美潢界』を読む

多田羅多起子

広島県内のある個人宅で調査をしたときのこと、数十本の掛軸を拝見し、広島藩ゆかりの書画や、近世から近代にかけての京都画壇の名手による画などを確認した。著名な画家や儒者の名前がついに付き、質の高い描写や手筋を見ることに気を取られていたところ、立ち会われた所有者から「子供の頃、これがよく掛かっていました」と声があがった。そのとき開いていたのは、ごくあっさり朝顔を描いた一幅で、なるほど夏の日にはこの軽さが目に心地よいだろうと思うものであった。

つられて、実家の小さな床の間に掛かっていた色紙掛を思い出した。筆者が生まれ育ったのは昭和後期の建て売り住宅であったが、六畳の居間の一角に半間の床の間があった。常に吊り下がっていた色紙掛の中身は、季節や行事によって替えられていた。色紙は、近隣寺院の南画教室に時折教えに來られていた村上志染しせん氏の手によるもので、水気をたっぷり含んだやわらかい筆致で果物や花、田園風景などが描かれていたと記憶している。それはカレンダーと同じように月日の移り変わりを告げるものであり、居間で過ごす家族に向けたしつらいであった。

同居者のための暮らしのアクセントとしてではなく、応接空間での床の間の役割を学んだのは、学生時代のアルバイト以降お世話になっていた会社に入ってからであった。来訪者や時期に合わせて床の間に掛ける書画を選ぶこと、軸を掛けたままにしないこと、座って見るときの目の高さや書画の位置、表装裂地の種類と季節との相性、花とのバランスなど、美術館や博物館のガラスケースにある掛軸とは異なる関わり方、見え方を体感として知ることができた。

そこは文化財の保存と修理の会社で、担当していた仕事のひとつに、過去の修理に関する問い合わせに応じた資料の出納があった。書庫で資料を探していると、周辺の資料が目に入る。このたび刊行された『近代京都の美術工芸Ⅱ——学理・応用・経営』（並木誠士編）収録の拙稿で取り上げた雑誌『美潢界』の存在を知ったのも、そんなときであった。凝った意匠の非常に美しい表紙にひかれ、つい手にとって開くと、モノクロ高精細の掛軸の写真が多数掲載されていた。巻末には売値を含む目録が収録され、掛軸の筆者には著名な画家の名がずらりと並んでいる。今や研究対象と

なっている近代京都画壇の画家たちが新作として描いた画、しかも床の間向けの画を知ることができる資料であることがわかった。雑誌本編には、当代一流の学者や文化人による論考も掲載されており、カタログとしての機能に留まらない力の入った編集方針に大きな関心を抱いた。

『美演界』は、明治四二年に設立された京都表具業組合による月刊の機関誌で、大正七年から昭和十五年にかけて刊行された。目をひく美麗な表紙をもつのは『美演界』のなかでも特に「表展号」として編まれたもので、毎年秋に開かれる「表展」を記念して刊行されていた。表展号は数十頁に及ぶが、その他の月は基本的に八頁の簡易なもので、業界関連のニュースや、著名な学識者、文化人による記事が連載される。表展は、その正式名称が「表装競技展覧会」であることから明らかなように、組合員の工房に所属する表具師たちの腕比べを表看板としていた。その一方で、京都画壇の著名画家の手になる画の即売場としての機能ももち、購入者に最上級の表装を保証するものでもあった。表展は、文部省美術展覧会や帝国美術院展覧会などの官展と時期や会場をあわせて開催されていた。官展の観衆の大半が会場での大作の「芸術鑑賞」を目的としていたのに対し、表展の観衆は自宅の床の間に最適な一幅を購求する目的も果たすことができ、特に大正中期には大きな売り上げを誇っていた。表展が中継点となり、展覧会会場と自宅の床の間をつないでいたと言えることもできる。

『美演界』が発行されていた大正中期から昭和戦前期にかけては、一般家屋における床の間の普及率が高くなり、床の間を飾る

掛軸の売買が盛んな時期でもあった。近世以前の流通経路とは異なるルートで新作絵画が商われ、明治末期以降は百貨店でも掛軸が扱われるようになる。表展のような展示会も、百貨店も、特別なコネクションをもたなくても掛軸が買える場として機能していた。人々はそこで、どのような価値基準で掛軸を選んでいたのであるのか。価格や揮毫者の知名度が大きな判断基準であることは言うまでもないが、画題や描法の傾向は展覧会出品作とどのような異なるのか（あるいは共通するのか）、どのような表装裂の取り合わせが好まれたのか、好みに地域差があるとすればどのような側面に表れるのかなど、個人宅の床の間における掛軸の受容をめぐる興味は尽きない。

展覧会で発表された大作と違い、一般に売買される掛軸の実態を伝えてくれる資料は多くはない。『美演界』に掲載される図版は、床の間向けの一幅の中でも上位に価値付けられたものであり、かつ、画にふさわしい表装を具体的に示す資料でもある。『美演界』をひとつの手掛かりとし、いわゆる「美術史的な意義」とは別の価値、日常的に目にする床の間にあつてちょうどよいという価値がどのように形成されていたのかを今後も探っていきたい。

（広島大学大学院人間社会科学部研究科准教授）

並木誠士編

『近代京都の美術工芸Ⅱ―物理・応用・経営』

A4判上製・六〇八頁／定価 一、三、一〇〇円

▼詳細34頁

謎の国王と髭の関係

ひらかわのぶゆき
平川信幸

今春、琉球国王の絵画がアメリカで発見されたというニュースは大きな話題になった。おかげで琉球絵画の名も少しは知られただろうか。琉球には日本絵画とも中国絵画とも異なる独自の絵画

様式があり、国王の肖像画である御後絵、花鳥画、山水画など個性ある作品が、王府の絵師たちを中心に制作された。廃琉置県によって王府がなくなっても、絵師たちは作品を制作するとともに、生き証人として琉球国時代の仕事、絵師科^{えしりか}とよばれた絵師の登用試験などの思い出や、先輩絵師について言葉や文章を残している。こうした生き残りの絵師の一人、長嶺華国に触発された新聞記者の末吉安恭によって、二〇世紀初頭に琉球絵画史研究が始まる。その後、末吉に影響を受けた鎌倉芳太郎や比嘉朝健らが主導し研究が進められていった。しかし、順調に進んでいたかのように見えた琉球絵画史研究は沖繩戦で一変する。かつて柳宗悦が日本美しい城下町と述べた首里は、首里城地下に第三二軍司令部壕が築かれたため、アメリカ軍の標的となった。そして、蓄えられていた美術作品のほとんどが王都首里とともに灰燼に帰したのだ。沖

繩戦直後、首里に入ることが許された人たちの話を聞くと、雪が降ったようにあたり一面真っ白であったという。琉球石灰岩の大地が粉々になるまで砲弾を浴びせられたのである。

オリジナル作品を扱うことが絵画研究のセオリーであるなかで、戦後の琉球絵画史研究は、非常に困難な状況にあった。研究をリードするはずであった末吉は戦争が始まる一〇年前の一九二四年水難事故で亡くなっていた。比嘉は一九二六年に上京し一九四五年に帰郷することなく奈良で病没していた。作品だけでなく人材も失われたのだ。一人残っていた鎌倉は一九三六年の発掘調査を最後に日本復帰直前の一九七一年まで沖繩へ渡る機会を失っている。また、戦後から日本復帰までの鎌倉の活動はどちらかというと型絵染の製作が中心となっていた。

こうした状況が変わるのが『沖繩文化の遺宝』（岩波書店、以下『遺宝』）が刊行された一九八〇年代からである。『遺宝』には鎌倉によって撮影された首里の寺院や美術工芸品とともに、御後絵をはじめとする琉球絵画の白黒写真が数多く収録されている。『遺宝』

に収録された御後絵はさながら曼荼羅のようで、中国の皇帝に似た衣冠を着用した国王を中心に、様々な道具を手にした家臣達が取り巻き、さらに背景には宮殿と思われる場所が細かく描写されている。肖像画であれば、国王一人をしっかり描けば、その威厳を表現するのに十分である。しかし御後絵には、琉球国王が「何を描いているか謎を解いてみる」と鑑賞者に出題しているかのようになが、様々な図像が描かれている。こうした御後絵の謎に答えることが、一九九〇年代以降の琉球絵画史研究の一つのテーマとなっている。筆者は今年の三月に肖像画を中心にその研究をまとめた『琉球国王の肖像画「御後絵」とその展開』を上梓した。国王の衣冠や家臣の持ち物、そして背景に描かれた衝立などの図像の意味について現段階で知り得る限りの知見を盛り込んだ。しかし戦前に撮影された白黒写真を研究の対象としていることから自ずと限界があり、図像の分析のみで色彩については触れることが出来なかった。ところが、本書が刊行されてからすぐ後、三月一日に冒頭で触れた驚くべきニュースがアメリカからもたらされた。四

点の御後絵が奇跡的に発見され、七九年ぶりに沖縄に帰ってきたのである。

拙著で詳細を論じたが、御後絵は「明代の国王の御後絵」と「清代の国王御後絵」の二つに分類することが出来る。中国の王朝交代によって、衣冠制度が大きく変わることがこの違いの要因の一つである。今回帰ってきたのは、明の国王の御後絵が二枚（尚清王、国王不明）。清の国王御後絵が二枚（尚敏王、尚育王）である。しかも尚清王と国王不明のものは戦前にも撮影されておらず、これまで

知られていなかった。残念なのは四枚とも状態が悪く、公開が難しいことだ。特に国王不明のものは三分割された状態で、すれて顔も分からなくなっている。そのため、修理が急務となっており現物の研究はもう少し先になりそうである。

明と清で国王の衣冠が異なるのは先述したが、これまで知られている御後絵の国王の冠は、若干形態の違いがあるもののいずれも皮弁冠として描かれている。ところが、不明の国王の冠は烏紗帽（うさぼう）となっている。皮弁冠は冊封を受けてはじめて国王がかぶることが出来るものである。そのため、多くの研究者は謎の国王を、明が滅亡したため冊封を受けることが出来なかった尚賢王と推定している。

五月に四枚の御後絵の写真パネルのお披露目があり、まじまじと国王不明のパネルを見ていたら、顎髭の存在に気づいた。東アジアの多くの国々と同じように、琉球で髭は成熟した男性を示すものであった。琉球の士族は二〇歳になると口髭を蓄え始め、三五歳前後には顎髭を伸ばす慣習があったという。尚賢王は数え二三歳の若さで逝去した。描かれた顎髭の存在が気になる。髭の習慣は、国王と士族など身分の違いも考慮に入れる必要があるが、描かれた人物を判断する一つの材料になる。今後、修理の過程で様々な調査が行われ、不明の国王の顔についても、もう少し具体的なことが分かってくだろう。御後絵を修理し公開していくなかで私たち世代が一番に考えるべきことは、一度失われた作品を責任をもって後世へ残していくことである。そのためには、慎重な対応が求められる。

（沖縄県立博物館・美術館主任学芸員）

マンガの夢、テクノロジーの夢

陰山 涼
かげ やま りよう

六月に日本マンガ学会のため京都を訪れた折、立ち寄った京都国立近代美術館で思いがけないものに出会った。数ヶ月ごとに内容が入れ替わるコレクション展の一角、ガラスケースの中に並べられた三冊の雑誌『マヴォ』である。同誌は一九二三年から数年間にわたって活動した美術グループ「マヴォ」の機関誌だが、私もこれまで後年に制作された復刻版でしか目にすることがなかった。ベルリン帰りの美術家・村山知義を中心に結成されたマヴォは、未来派・ダダ・構成主義といった西洋の美術における最新の潮流を強く意識しつつ多彩な活動を展開したことで知られている。この時期の日本美術界における一連の前衛的な動向は総じて「大正期新興美術運動」と呼ばれるが、その中核を担ったグループだ。マヴォの詳細については美術史家・五十殿利治氏による大著『大正期新興美術運動の研究』（スカイドア、一九九五年）に譲るとして、マンガ史研究者である私にとって気になるのは、その一員であった高見澤路直の存在に他ならない。村山に感化され積極的に活動に参加したこの人物はその後、戦前日本で最も成功した子供マンガ『のらくろ』の作者・田河水泡^{たがわすいほう}として知られることになる。

画家志望だった高見澤は一九二二年に日本美術学校に入学、翌年には帰国したばかりの村山と出会い、次第にマヴォの中心的なメンバーとなっていく。西洋美術の動向に学び来るべき芸術を理論的に示そうとした村山に対し、高見澤は自らの活動の理論的・思想的な背景についてほとんど語らなかった。どちらかといえば、村山を中心に導き出されたいくつかの「新興」的な傾向、すなわち、既成画壇への反抗、抽象表現への志向、絵画からの逸脱、機械や工業的なモチーフといった運動の性格に興味を持ち、これらを積極的に（そして時に過激に）実現しようとした行動派というのが、マヴォにおけるその立ち位置だったようだ。権威主義化しつつあった二科展への抗議として落選作品を会場周辺で展示した「二科落選歓迎移動展」への参加をはじめ、工業的な部品を組み合わせた立体作品『Poiesis』や、騒音を発生させる装置「サウンドコンストラクター」を使ったパフォーマンスなど活動は多岐にわたった。とはいえこのような活動で生計を立てることは難しかったらしく、村山の脱退を機にマヴォの運動が退潮していくなか、高見澤は一九二七年ごろからマンガ家・田河水泡へと転身していく。

田河の名で発表された作品の多くは娯楽的なユーモアを基調とした子供向けのマンガだった。六月の京都で見ることができた一九二四年九月刊行の『マヴォ』三号では雑誌の表紙に本物の癩癧玉や毛髪を貼り付けた高見澤の過激さに比べれば、講談社を中心とした大衆的な雑誌での田河の仕事はいたって穏当なものと言える。それでも初期のマンガには、前衛的な芸術運動に由来するモダンなモチーフも見え隠れしていた。例えば「のらくろ」以前に雑誌『富士』で連載された「人造人間」では、新奇なテクノロジーがもたらすコミカルな物語が描かれている。日本初のロボットを題材とした連載マンガとも言われる本作で、主人公の人造人間「ガムセー」はしばしば自らを製作した博士の命令を無視し、暴走

的な行動を繰り返していく。「ポンコツロボット」とそれに振り回される博士という典型はこの時点ですでに成立していた。機械のエネルギ―と娯楽的なドタバタコメディが結びついたこの作品は、高見澤＝田河の経歴の結節点とも言えるだろう。その後『少年倶楽部』一九三一年一月号から連載が始まった「のらくろ」でも、たびたび登場する自動車や飛行機の描写にこのような関心の跡がうかがえる。

「のらくろ」の成功を受け、一九三〇年代に子供向けマンガの市場は飛躍的に拡大していく。多くが「少年」向けとして制作されたこれらのマンガでは、しばしば飛行機などの乗り物やロボットのような新奇な「発明」が憧れの対象として登場した。田河が二〇世紀初頭の前衛芸術から引き受けた近代的なテクノロジーのイメージは、現実社会における技術の発展とも歩調をあわせつつ、

娯楽的な子供文化の中にその居場所を見出したのである。しかしまた、三〇年代は戦争の時代でもあり、これらのテクノロジーが軍事的な技術と結びつくのも避けがたいことだった。このような「テクノロジーの夢」は、やがて「軍国主義の夢」へと読み替えられていくことになるだろう。

ところでこの「夢」は、一九四五年度の敗戦とそれに伴う政治的転換によって遂に消え去ったのだろうか。事態はそう単純ではなさそう。誰もが知る「鉄腕アトム」の活躍は、戦後の日本が軍国主義を否定しつつ再び「テクノロジーの夢」とともに出発しようとしたことを示しているようだ。あるいはこの種の夢は、「近代」や「テクノロジー」を素朴に信じることが困難な時代にもなお形を変えて生き延びてきたのではないだろうか。そして、長らく「子供向け」という建前のもとに流通してきたマンガこそ、この極めて二〇世紀／日本的な夢を繰り返し演じてきたジャンルなのかもしれない。もしもマンガが、夢見る頃を過ぎててもなお見ることのできる夢として機能してきたのであれば、この夢の功罪とともに、およそ百年にわたるその表現の歩みをたどることができないのではないか。そういうわけで、目下のところ私の研究には「マンガにおけるテクノロジー表象の歴史的研究」という題目が付けられている。

（東京大学大学院総合文化研究科博士後期課程）

高山彦九郎遺墨

皇居三の丸尚蔵館は、大手町・丸の内のビル群からお堀を隔てた皇居東御苑内、江戸城三の丸の跡地に位置している。尚蔵とは律令のことばで「蔵司」の長官をあらわし、また転じて大切に守るという意味で使われる。平成五年（一九九三）に「宮内庁三の丸尚蔵館」として開館し、三〇年来活動をおこなってきたが、令和五年（二〇二三）に独立行政法人国立文化財機構へと移管され、館名も新たになった。令和元年から始まった新館の整備工事はなおも続いており、令和八年に全面開館を予定している。

当館の収蔵品の母体は、上皇陛下とその母君・香淳皇后から平成元年に国へ寄贈された六千点あまりの美術工芸品だ。そこに各宮家からの遺贈品等が、断続的に加わってきた。多くは、自治体や個人、諸団体、各国元首などから天皇や皇族へ献上されたもの。一般に、美術品のコレクションには蒐集者の好みや歴史観などが反映され、近年では学問的に評価がなされつつある。一方で、三の丸尚蔵館の収蔵品には主体的な蒐集者が存在しない。その時や

機会に応じて、皇室にふさわしいと考えられたものが献上された。様々な人々の想いの総体が当館へ受け継がれ収蔵品を形成しているのが、最大の特徴だ。

一方、京都。思文閣からほど近い三条大橋のたもとには、地に伏し、恭しげに御所をみつめる男の像がある。「高山彦九郎皇居望拝之像」だ。高山彦九郎は、延享四年（一七四七）、上野国新田郡（群馬県太田市）の生まれで、名は正之、字は仲繩。蒲生君平、林子平とともに、俗に寛政の三奇人と呼ばれる。彦九郎はたいへんな筆まめで、太田市立高山彦九郎記念館によれば、安永二年（一七七三）から没する寛政五年（一七九三）まで、断続的に四二もの日記を残している。

南朝を支えた新田義貞の重臣の後裔であることを強く自認し、初めての上京時には三条大橋に伏し、御所に向かって忠義の想いを叫んだという彦九郎。天皇とのつながりを強く求めていたのである。寛政三年には、菅南涯の縁者が発見したという甲羅から緑

じょうしよ さと
上嶋悟史

（皇居三の丸尚蔵館学芸部研究員）

の毛が生えた亀を「文治之兆」として人々に喧伝した。この亀は寄宿先であった岩倉具選ら公卿の仲介で御所に持参することが叶い、最終的には仙洞御所に放たれた。

当時の天皇は、第一一九代光格天皇だった。傍系からの踐祚ということもあってか、光格天皇は向学心が強く、管弦や入木道、歌道など諸芸に熱心であった。また復古意識も強く、天明の大火で焼失した内裏の再造宮にあたって復古様式が採られたのも、光格

天皇による意向に依るところが大きかったといわれている。

若く意欲に満ちた光格天皇はさまざまなものに興味を示し、周囲の皇族や公卿も珍品と見るや光格天皇に上進したらしい。例を挙げると、実

兄・妙法院宮真仁法親王は、山科で捕獲された全身が赤紫色で白い羽毛のまじった「白鳥」や、円山応挙画「七難七福図巻」（相国寺蔵）を進覧

し、富小路貞直は原在中画・皆川淇園記の画卷「飛驒三奇」（飛驒の学者・好石家である二木長嘯作の浄写本）を進覧した。緑毛亀がもたらされた際に天皇は彦九郎を知っていると述べたとされており、それを伝聞した彦九郎は「玉の御声のかかるうれしさ」と、感激の想いを歌に詠んだ。

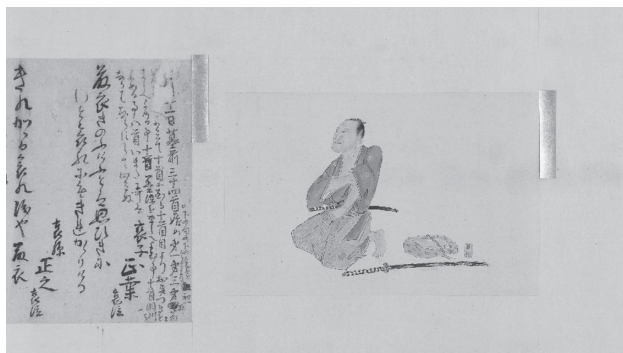
皇居三の丸尚蔵館には、「高山彦九郎遺墨」という作品が収蔵されている。これは、彦九郎の祖母・りんを悼み、彦九郎本人および縁者・知人が詠んだ全一四紙にわたる哀悼歌を貼りこんだ「高山彦九郎喪中歌草稿」一卷と、彦九郎自筆の日記「恋山湯旅の記」「江戸旅中日記」「齊中記」全三冊の総称で、同一の箱に収められている。彦九郎の遺族・剣持家より矢島行康（一八三六―九五）に譲られ、明治二〇年（一八八七）に宮内大臣・土方久元を通じて矢島より献上された。

生涯にわたって各地を歴遊した彦九郎であったが、りんの死後は朱子の『家礼』に則して喪屋にこもり、三年間ひたすらに服喪した。例えば次の歌は、「祖母君」が夢に現れ、覚めた後に詠んだという五首のうちの一首である。

夢のうちは夢とも知らで夢さめて

夢と思へと夢も恋しき

夢を見ているうちは夢とは知らず。夢と知ってもなお恋しい。激情あふれるこの歌に、彦九郎は「哀孫彦九郎哀泣」という署名をしている（同首は矢島行康撰『高山朽葉集』巻之二にも収録される）。



高山彦九郎喪中歌草稿(部分) 江戸時代(18-19世紀)

皇居三の丸尚蔵館収蔵

そんな祖母への強い思慕の念が記された「高山彦九郎喪中歌草稿」だが、巻頭には、上野国の南画家・金井烏洲による彦九郎の肖像が貼られている。「月ヶ瀬探梅図巻」（東京国立博物館蔵）をはじめとした山水画あるいは実景図のイメージが強い烏洲にあって、肖像画の作例はきわめて珍しい。同郷の、しかも勤皇の志を同じくする彦九郎の姿であればこそ、描くことにはやぶさかでなかったであろう。烏洲は彦九郎没後に生まれ、面識は得べくもなかった。しかしこの肖像画の意志のこもった眼差しや傍らの日記と旅荷には、喪が明け、満を持して旅路に踏み出さんとする彦九郎の決意と生きざまが的確にあらわされている。なお、烏洲の息・之恭は明治三年に彦九郎の伝記『高山操志』を刊行し、同二四年に貴族院議員に勅選されている。

三冊の日記はいずれも、矢鳥行康が明治一〇年に刊行した『玉の御声』に収録されている。その翌年の三月には、彦九郎に正四位が贈られ、矢鳥の発起になる高山神社の創建許可が下された。さらに、同年秋の北陸巡幸において、陪員であった岩倉具視を通して明治天皇へ「遺墨」の進覧がなされたことが、昭和一九年刊の『高山朽葉集』所載の「矢鳥行康翁小伝」に記されている。事実、「高山彦九郎喪中歌草稿」の軸には、「天覧明治十一年右大臣岩倉公御執奏／信乃國小縣郡本海野村矢鳥行康」の墨書がある。

皇居三の丸尚蔵館では全面開館までの間により多くの方々に収蔵品をご覧いただくため、令和三年（二〇二一）度から各地で収蔵品展を開催している。本年九月二二日（土）から一〇月二七日（日）には、北海道立近代美術館（札幌市）にて「皇居三の丸尚蔵館展

皇室の至宝 北海道ゆかりの名品」が開催される。近世から現代にいたるまでの皇室と北海道とのかかわりを紹介しながら、行幸啓にまつわる古写真や献上品、北海道ゆかりの作家による作品など皇居三の丸尚蔵館の収蔵品を展示する。松前藩の家老で画人としても知られた蠣崎波響が描いた「夷酋列像」が、波響と親しい彦九郎の功によって多くの人物に閲覧され、ついに光格天皇の観覧に供されたことはよく知られているが、本展では、「夷酋列像」の模本や光格天皇の目に触れた円山応挙や呉春、月儼などによる絵画とあわせ、「高山彦九郎喪中歌草稿」が展示される。北の地で近世京都の文化を堪能できる、またとない機会となるだろう。

皇居三の丸尚蔵館

【所在地】

〒100-0001
東京都千代田区千代田1-8
TEL: 050-5541-8600（ハローダイヤル）
ホームページ <https://shozokan.nich.go.jp>
©Instagram @shozokan_pr

【交通アクセス】

- 大手門（入門してから約100メートル）
地下鉄各線の大手町駅（C13a出口）から徒歩約5分
JR東京駅（丸の内北口）から徒歩約15分
- 平川門
地下鉄東西線竹橋駅（1a出口）から徒歩約10分
- 北桔橋門
地下鉄東西線竹橋駅（1a出口）から徒歩約15分
※大手門以外は、月曜日・金曜日閉門。その他皇居東御苑の公開日時に準ずる。

【開館時間】

9時30分～17時（最終入館は16:30まで）

【休館日】

月曜日（ただし月曜が祝日または休日の場合は開館し、翌平日休館）、年末年始、天皇誕生日および展示替期間

【入館料】

一般 1,000円、大学生 500円、高校生以下及び満18歳未満、満70歳以上の方は無料。
その他、詳しくは公式サイトをご確認ください。

▼「歴史学は現代社会を生きるうえで役に立つのか？」歴史学に関わるすべての人が、何度となくぶつかり、簡単には答えを出せない問いではないでしょうか。「ていーたいむ」でお話をうかがった上川通夫先生は、この問いに正面から向き合い続けてこられました。その研究者としての真摯な姿勢が印象的でした。近刊の『民衆仏教の形成と日本中世』は、それに対するひとつの答えにほかなりません。地道な実証研究の背後にある大きな構想が、本書を一層魅力的なものにしています。「思文閣人文叢書」の三冊目にご期待ください。

▼『織豊期主要人物居所集成』の初版が刊行されたのは二〇一一年。当初から将来の増補の計画があったものの、なかなか実現にはいたりませんでした。このたび一三年を経て、いよいよ増補改訂が実現します。基本図書として長く利用していたければ幸いです。

▼学術論文の即時オープンアクセス化方針が示されるなど、学術をめぐる環境は目まぐるしく変わっています。出版社の役割も大きく変わることは間違いありません。時代の変化をしつかりと見据えつつ、時代に左右されない普遍的な価値のある出版物を生み出していきたいと思っています。

▼中野重治が編集者にあてた一首「鬼のとき君が督促はつまるところ愛のごとかりしものと我は合点す」。本を出すには何らかの圧力が必要。なかなか鬼になり切れませんが愛のある仕事をしたいです。(R)

▼先日駅で「静電気学会全国大会」なるものの告知ポスターを見かけました。思わず下敷きと髪の毛を連想しながらも調べてみたら、創立50年近い由緒正しき学会でした。世の中は知らないことだらけです。(n)

▼八月までが暑すぎたせいなのか、今になって蚊に刺されています。過ぎしやすく読書にびったり、とは言い切れない暑さがまだ続いています。なぜか蚊のおかげでじんわりと秋を感じるこの頃です。(c)

▼夏休みは、関西の陸の孤島ともいえる和歌山に運び、隔絶感を味わった。たまたま、途中下車した駅前に書店があった。地域由来の自家製本を探す。大抵歴史もので、これがあると旅は何倍もおもしろい。(大)

▼表紙図版：作者不詳《Tete de Vieillard (head of an old man)》京都工芸繊維大学美術工芸資料館蔵

『鴨東通信』は年2回（春・秋）刊行しております。代金・送料無料で刊行のつどお送りいたしますので、小社宛にお申し込みください。バックナンバーも在庫のあるものについては、お送りいたします。詳細はホームページをご覧ください。

鴨東通信 No.119

2024（令和6）年9月27日発行

発行 株式会社 思文閣出版

〒605-0089

京都市東山区元町335

tel 075-533-6860

fax 075-531-0009

e-mail pub@shibunkaku.co.jp

<https://www.shibunkaku.co.jp/publishing/>

表紙デザイン HON DESIGN

倉本一宏（国際日本文化研究センター名誉教授）著

摂関期古記録の研究

10月刊行予定

A5判上製・三三〇頁／定価八、八〇〇円

日記とは何か、古記録とは何か？ 長く古記録に関わる研究を牽引してきた著者による、二十数年余りの間に発表された摂関期の古記録に関する論考と、新稿をまとめた論文集。

古記録と具注暦を概観し、『小右記』の「記録」状況の仮説を提示する第一部、『小右記』や『御堂関白記』『権記』などの古記録とその写本の表記を詳細に比較分析する第二部、おもに説話に関わる論考から『小右記』の特異性や摂関期の「天皇」号を考察する論考までを盛り込んだ第三部で構成する。古記録研究の到達点を示すとともに、未来への礎となる一書。

倉本一宏編

日記・古記録の世界

日本の日記・古記録を題材として、関連分野の第一線の研究者がそれぞれの視点からその本質に迫った論文集。

定価 一三、七五〇円

大津透・池田尚隆編

藤原道長事典―御堂関白記からみる貴族社会

好評3刷

国宝『御堂関白記』（陽明文庫蔵）にみられる語句・表現を中心に、約一〇五〇項目を立項。

定価 六、六〇〇円

第一部 古記録の研究

第一章 日記が語る日本古代史

第二章 『延喜式』と領暦・具注暦

第三章 『小右記』の記録状況

第二部 古記録の分析

第一章 『小右記』の仮名

第二章 『御堂関白記』の仮名再考

第三章 『御堂関白記』古写本を書写した「某」

第四章 三条朝の公卿議定

第五章 『権記』に見える配偶者の表記

第六章 『小右記』に見える藤原実資の配偶者と表記

第三部 古記録と貴族社会

第一章 藤原兼通の政権獲得過程

第二章 「コノ話ハ蓋シ小右記ニ出シナラン」考―『小右記』と説話との間に―

第三章 平安貴族社会における「老い」

第四章 摂関期の君主号

終章 古記録研究の展望

倉本一宏著

『御堂関白記』の研究

藤原道長の日記『御堂関白記』について、論文からエッセイまでを蒐めたアンソロジー。

定価 八、八〇〇円

有富純也・佐藤雄基編

摂関・院政期研究を読みなおす

古代・中世を専門とする中堅・若手の研究者が研究史を振り返り、研究の最前線と展望を示す。

定価 五、〇六〇円

表示価格は税込

西山剛（京都文化博物館学芸員）著

輿をかつぐ人びと

— 駕輿丁・力者・輿舁の社会史 —

12月刊行予定

A5判上製・四三〇頁／
定価 九、九〇〇円

本書の目的は、前近代社会における職能集団の存在形態を、中近世を通じて長期的なスパンで考察しその実態を明らかにすることにある。とくに各権門の有力者の移動に際して輿を昇き、その移動を直接的に担った人々を対象とし、実体的な諸側面に光をあてながら具体的にその姿を捉える。異なる身分、異なる社会層の中で活動する「輿舁」の実態に光をあて、諸側面を比較することで、輿を昇くという行為そのものの社会的な意義を問う。

桃崎有一郎（武蔵大学教授）著

鎌倉幕府礼制史

— 儀礼論と組織論 —

11月刊行予定

A5判上製・約五九二頁／
予価 九、三五〇円

史上初の武家政権であった鎌倉幕府には、儀礼・年中行事の面で参照すべき前例が皆無であった。そのため鎌倉幕府はゼロから儀礼体系を構築した。唯一の先例と言えるものとして、朝廷の年中行事があったが、それらを再現する場や人員を持たない鎌倉幕府は踏襲できなかったし、踏襲しようとする姿勢も見られなかった。

では彼らはいかなる意図で、いかなる儀礼を作り上げたのか。本書では、「鎌倉幕府儀礼は全体としていかなる体系であったか」を解き明かすことを目指し、とくに鎌倉幕府の最重要儀礼である炕飯儀礼の意味や成立、展開を読み解いていく。それにより、鎌倉幕府儀礼の特色の一つが、執権の至高性を演出する主従（縦）関係ではなく、執権も御家人であるという傍輩（横）関係の演出・確認であることを明らかにする。

苦名悠著

失われた院政期絵巻の研究

A5判上製・三五八頁／
定価 八、二五〇円

平安時代末期に制作された絵巻の諸作品は「院政期絵巻」と総称され、現存する最古の絵巻群として、早くから美術史学の研究対象として取り上げられてきた。一方で、多くは史料にその名が見えるものの原本が失われており、これらの作品が美術史学の研究対象として取り上げられる機会は少ない。

本書は、原本が失われた絵巻作品を積極的に取り上げ、模本によってその絵画表現を分析することなどを通じて、これらの作品を含めた院政期絵巻の再評価を試みたものである。

倉本一宏編

貴族とは何か、武士とは何か

A5判上製・六九六頁／定価 一、〇〇〇円

約四百年にもわたり、貴族が栄華を誇った平安時代。平和な世から武士が発生し、政権を樹立するまでに至ったのはなぜか？ 貴族たちはなぜ武家政権の成立を許したのか？

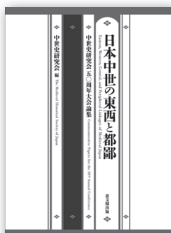
そして武家政権下で公家が存続できたのはなぜか？ 「貴族と武士」という日本史の最重要テーマを、古代・中世・近世・近代・東洋史の研究者約40名が集い議論する。

日本中世の東西と都鄙

—中世史研究会五〇周年大会論集—

9月刊行

A5判上製・四〇〇頁／定価 一一、〇〇〇円



一九七三年に創設された中世史研究会は、東海地域を拠点にし、関東・関西の諸学会と並び、日本中世史研究の発展に半世紀にわたって貢献してきた。本書は、創立五〇周年を記念して行われた2年間のシンポジウムの成果である。第1部には、東国とされる地域と西国とされる地域のそれぞれの社会構造はどのように描けるかを論じる諸論考、第II部には都鄙の関係性や相互認識のあり方を論じる諸論考を収め、併せてシンポジウム当日のコメント、討論記録も収録。政治権力論だけでなく、流通経済や文化意識にも目を向け、中世の列島社会の特質に迫る。

川岡勉編

中世後期の守護と文書システム

「守護とは何か」という課題に正面から挑み、そのあり方を全国的規模で把握する。

定価 一一、一〇〇円

川岡勉著

戦国期守護権力の研究

戦国期守護論を提示して当該期の権力論の再構築を目指す。

定価 九、九〇〇円

〔目次〕

第I部 列島東西の社会構造とその変質

- 第1章 鎌倉・京都・博多の問隙 (斎藤夏来)
- 第2章 北遷武家領主と鎌倉期東国武家社会 (田中大喜)
- 第3章 瀬戸内海流通の構造転換―「陶晴賢安芸散島提書写」の再考 (中島雄彦)
- 第4章 織豊期の都市法と諸地域 (山下智也)
- 第5章 東西戦国大名の「地域国家」像 (鹿毛敏久)
- 第6章 戦国期における室町將軍・古河公方の栄典授与と地域性 (小久保嘉紀)

第II部 都鄙の連関と相互認識

- 第7章 中世前期の道隆流坊門家と都鄙交流 (長村祥知)
- 第8章 南北朝期禅僧の関東認識 (池田文明)
- 第9章 「東海」地域の成立と京・関東 (水野智彦)
- 第10章 伊勢神宮地域をめぐる金融・信用と信仰経済―特に都鄙間の「地域性」の視点から (千枝大志)
- 第11章 後奈良天皇の諸国への意識―般若心経の奉納を中心に (上嶋康徳)
- 第12章 戦国期宗教勢力の都鄙の世界―本願寺を素材として (安藤 悠)

長澤伸樹著

楽市楽座令の研究

楽市楽座令や楽市場が、中近世移行期の社会変動にどう位置づけられるのか再考する。

定価 九、九〇〇円

石井伸夫・仁木宏編

守護所・戦国城下町の構造と社会

ユニークな空間構造をもつ一六世紀の地方都市・勝瑞の姿を、多様な視角から解き明かす。

定価 七、二六〇円

上川通夫（愛知県立大学教授） 著

民衆仏教の形成と日本中世

〔思文閣人文叢書〕

今冬刊行予定

A5判上製・五〇〇頁／予価 九、九〇〇円

国家宗教として日本に導入された仏教は、中世にいたって広く社会に定着したとされる。ただし中世仏教は、権門体制論や顕密体制論において、権力側が民衆を編成し、抑圧する装置としての側面が強調されている。はたして中世の民衆は仏教を押し付けられただけの存在なのか？ 本書は、民衆自身の生存と権力支配への抵抗を求める普遍的な思想が、仏教の用語や思想（慈悲、不殺生、和合など）と接することで表現された可能性を追求する。断片的ながら願文、起請文、村の禁制、地域の小規模寺院の存在などに史料の痕跡を見出し、民衆思想として萌芽した状況を浮かび上がらせる。

村井祐樹著

中世史料との邂逅

—室町・戦国・織豊期の
文書と記録

合縁奇縁に出会った様々な史料たちから特に印象深かったものを選び、読解・分析した一書。
定価 一、〇〇〇円

大澤研一著

戦国・織豊期大坂の都市史的研究

十六世紀から十七世紀初頭にかけて、大坂は都市としてどのような変遷をとげたのか。
定価 一四、六三〇円

〔予定目次〕

序 日本中世民衆仏教研究の課題

第一部 ユーラシア東辺列島における仏教導入

- 1 六、七世紀における仏書導入
- 2 古代仏教と最澄の「一乗思想」
- 3 入唐求法僧と入宋巡礼僧
- 4 北宋・遼の成立と日本
- 5 十世紀における地域社会の胎動
- 6 十一世紀の如法経と経塚
- 7 十二世紀真言密教の社会的地位——大治と建久の間
- 8 十二世紀日本仏教の歴史的位置

第二部 中世民衆仏教の可能性

- 1 写経と印信——平安仏教の展開と転形
 - 2 経塚・造仏・写経——民衆仏教形成の条件
 - 3 起請と起請文——永暦二年（一一六二）永意起請木札をめぐる
 - 4 『平家物語』と中世仏教
 - 5 勅進帳・起請文・願文
 - 6 寺院縁起と地域社会——三河・尾張の山寺
 - 7 中世の巡礼者と民衆社会——出土禁制木札から
 - 8 中世民衆思想の探究——木札・像内文書・仏書を例に
- 結章 民衆仏教から民衆思想へ

片山正彦著

豊臣政権の東国政策と徳川氏

「惣無事」論や「取次」論を語る際に前提とされてきた通説をくつがえすことを試みた意欲作。
定価 六、六〇〇円

法隆寺編

法隆寺史 中——近世

日本最初の世界文化遺産である法隆寺一四〇〇年におよぶ歴史を通観する、初の寺史。全三巻のうちの中巻。定価 七、四八〇円

表示価格は税込

京都府立京都学・歴史館編

東寺百合文書 第十六巻 ル函二

9月刊行予定

A5判上製函入・四五六頁／定価 一五、四〇〇円

京都大学文学部日本史研究室編

藤井讓治編・解説

〔京都大学史料叢書20〕晴豊公記

10月刊行予定

A5判上製函入・約四三三頁／予価 一六、五〇〇円

篠崎佑太著

近世後期の大名家格と儀礼の政治史

〔30s〕

近世後期から幕末期にかけて、「内憂外患」の政治状況下で幕藩関係はいかなる変容を遂げたのか。

定価 一一、五五〇円

清水翔太郎著

近世大名家の婚姻と妻妾制〔30s〕

一七世紀から一九世紀までの史料を元に、大名家における婚姻と家族構成員の実態を明らかにする。

定価 九、九〇〇円

東寺百合文書とは、東寺に襲蔵されてきた、奈良時代から江戸時代初期まで約九百年にわたる、総数一万八千点・二万七千通におよぶ日本最大の古文書群である（二〇一五年ユネスコ世界記憶遺産に登録）。本史料集には「ひらかな之部」刊行中の『大日本古文書』未収録の「カタカナ之部」を翻刻。二年ぶり待望の第十六巻。

近世初頭にかけて代々武家伝奏を務めた勸修寺家一五代当主、勸修寺晴豊（天文一三年生、慶長七年没）の自筆日記。天正六年にはじまり、文禄三年まで一六年にわたるが、その間多くの欠失があり、一年を通して残されているのは天正一八年分のみである。本日記は、一九六三年に京都大学文学部国史研究室内の所蔵となった勸修寺家文書の一部（現在は京都大学総合博物館収蔵）、および内閣文庫所蔵の原本を使用した。このほかに晴豊が関わった、口宣案や繪旨、書状案を中心とした永禄二年〜慶長七年の符案や記録を収録。

上島有・大山喬平・黒川直則編

東寺百合文書を読む

東寺百合文書の中から50点を選び、魅力の一端を紹介する。

定価 二、七五〇円

東寺文書研究会編

東寺執行日記 第二巻〔全三巻〕

東寺長者系列の寺内の要職である執行の公務記録。本シリーズではその中世部分を翻刻する。

定価 一五、四〇〇円

表示価格は税込

末岡照啓（住友史料館研究顧問）著

徳川幕臣団と江戸の金融史

―札差・両替商の研究―

10月刊行予定

A5判上製・三九二頁／定価八、八〇〇円

徳川幕臣団（旗本、御家人）の俸禄米を担保とした貸付けによって家計を支えた札差^{ださし}、旗本知行所の年貢米を受けとり家計の面倒をみた両替商など、江戸の有力商人の経営実態について、幕府の金融政策を通して分析。従来の高利貸しと困窮する武士といった画一的なイメージを超えて、幕藩体制を維持するために幕府、幕臣団、有力商人たちがそれぞれの思惑を抱きつつも、相互に依存する関係性を浮かび上がらせる。また研究史上、上方に比べて軽視されてきた江戸の金融史の再評価も企図する意欲作。

安国良一著

日本近世貨幣史の研究

近世貨幣はどのように生まれ、流通し、終焉をむかえたのか――。

定価七、四八〇円

高木久史著

近世の開幕と貨幣統合―三貨制度への道程

現在の貨幣システムや貨幣統合を考えるためのヒントが、近世開幕期にある！

定価七、一五〇円

【目次】

序章 本書の目的

第一部 徳川幕臣団と札差

- 第1章 近世蔵米知行制の成立と御張紙値段
- 第2章 札差仲間の成立・変遷と寛政の棄捐令
- 第3章 札差証文について
- 第4章 天保の無利息年賦返済令と札差
- 第5章 幕末期の札差経営―泉屋甚左衛門店の経営分析
- 第6章 近世における旗本救済策と勝手賄いの特質
- 第7章 明治維新後の幕臣団と札差

第二部 幕藩領主と江戸両替商

- 第8章 江戸両替商仲間の結成と金融政策
- 第9章 江戸両替商の代官・田安家・一橋家掛屋業務
- 第10章 江戸両替商の大名・旗本金融業務と商用貸付
- 第11章 明治維新後の江戸両替商

終章―江戸札差と両替商の位置づけ

今井典子著

近世日本の銅と大坂銅商人

大坂の銅商人社会が成立・変容する過程を軸にして、銅の生産・流通の歴史を通覧。

定価八、二五〇円

朝尾直弘監修／住友史料館編

住友の歴史 上・下巻

近代の財閥につながる豪商の一典型である住友の歴史をわかりやすく紹介。

定価各一、八七〇円

表示価格は税込

高久嶺之介（京都橋大学・同志社大学名誉教授）著

北垣国道の幕末と近代京都

9月刊行予定

A5判上製・二七四頁／定価七、七〇〇円

住友史料館編

住友史料叢書三七

主管者協議会議事録一

12月刊行予定

A5判上製函入・約五二八頁／定価二二、一〇〇円

塵海研究会編

北垣国道日記「塵海」

十五年間にわたって京都で続けられてきた
塵海研究会の翻刻成果。

定価一〇、七八〇円

高久嶺之介著

近代日本と地域振興―京都府の近代

近代日本の地域社会の姿を京都府下における
地域振興の視点から考察する。

定価七、一五〇円

近代京都の琵琶湖疏水事業などで知られる第三代京都府知事、北垣国道（一八三六―一九一六）。本書はその波乱に満ちた幕末から晩年にかけての生涯を浮かび上がらせる。幕末の「生野の変」や「天狗」騒動を経て、京都府知事として京都宮津間車道および琵琶湖疏水事業にたずさわり、晩年の北海道庁長官へといった経緯、そのなかでつちかわれた人脈や行動の考察によって、従来とは異なる人間・北垣国道像を描き出す。

一六二〇年代から大坂で銅の精錬を業とし、一時世界銅産市場においても重要な位置を占めた住友家は、その後金融・貿易などを手がけ、近代の財閥につながる豪商の典型である。本叢書はこれまで住友家文書のなかから近世史料を編纂してきたが、今回より新たに住友近代史料のなかからも重要なものを選び翻刻する。その初回にあたる本巻では、主管者協議会議事録のうち、大正二年から六年までを収載。

小野芳朗編著

水系都市京都―水インフラと都市拡張

近代京都の都市史を水量・水質・水利権に着目して
水インフラという視点から論じる。

定価五、九四〇円

小野芳朗著

風景の近代史

風景を編集し、物語を紡ぎ、観光地を生み出す仕組みを
あぶりだす。

定価四、九五〇円

表示価格は税込

本多三郎（大阪経済大学名誉教授）著

ブリテン資本主義下の

アイルランド農業―土地戦争の経済史的背景

12月刊行予定

A5判上製・八一六頁（予定）／予価 一六、五〇〇円

草を食む家畜がアイルランドの大地を占領し、人々は消えていった。大飢饉により住民の海外脱出と移民に一気に弾みがつき、一八九一年に行われた国勢調査では羊の数が人間を上回り、一九〇一年には牛の数が人間を上回った。自然と人間の力が和合して発展していく農業の取り組みもそこにあったが、アイルランド農業がロンドンを初めとするブリテン市場の動向に左右される傾向はますます強まり、大規模な土地支配の利害が絡み合った投機資本の参入さえ広がっていた。本書は、「世界の工場」ブリテンの横腹に抱え込まれていくアイルランドの十九世紀経済史最後の言葉「家畜増え、民失う小さな国」を同時代の資料で実証するものである。

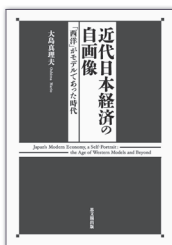
大島真理夫著

近代日本経済の

自画像―「西洋」がモデル

であった時代

A5判上製・五七〇頁／定価 八、八〇〇円



日本にとって西洋は明治以来、二一世紀にいたるまで、自国の立ち位置を確認する比較軸Ⅱ分析モデルであった。しかし今日の世界を見渡すと、そうした時代は終焉を迎えたようである。本書は、過去一五〇年にわたる日本の自国認識の変遷を「西洋がモデルであった時代」ととらえることで見えてくるものを探ろうとする試みであり、求められる新たな自画像を地に足の着いたものにするために不可欠な基礎作業を提示する。

板垣貴志著

牛と農村の近代史 ―家畜預託慣行の研究

牛を介して取り結ばれる人々の社会関係を明らかにし、それが近代農村で果たした歴史的意義を解明する。

定価 五、二八〇円

岩本真一著

近代日本の衣服産業

―姫路市藤本仕立店にみる展開

戦時経済統制や他産地の動向など、時代の流れに翻弄された姫路市藤本仕立店の実態を浮き彫りにする。

定価 七、七〇〇円

【目次】
まえがき

序章 アイルランド大飢饉 1840年代後半～50年代前半

第1部 19世紀後半アイルランド農業の展開

第1章 大飢饉後の農業の構造転換

第2章 牛を中心とした家畜の全国的流通

第3章 生きた家畜をはじめとする大規模な畜産物輸出

第4章 1870年代における農民層分解の全国的分析

第2部 アイルランド農業の担い手を地域から見る

第5章 酪農の中心地で肉牛生産の出発地である南西部マンスター

第6章 北部アルスター経済

第7章 西部のメイヨーへ、コナハトへ行くこと

第8章 北東部レンスター・ミーズの大牧畜業―人影がなぐ草を食む家畜だけが見える大牧場地帯

第3部 ブリテン資本主義下のアイルランド農業と農村

第9章 19世紀後半アイルランド農業を担う人たちが家畜増え 民失う小さな島国アイルランド

終章 あとがき／資料・文献目録／索引

表示価格は税込

万博学研究会編

万博学／Expo-logy

第3号

【特集 大阪万博前後の世界】

A5判並製・二〇〇頁／予価 二、二〇〇円

日本で万国博覧会が語られるとき、当然のように七〇年大阪万博が中心に据えられる。今号の特集では、そうした見方を相対化し、前後する時期に開かれた万博や世界状況に視野を広げ、一連の流れのなかでこの時代をとらえなおすことを試みる。

万博学研究会編

万博学／Expo-logy

創刊号

【特集 植民地なき世界の万博】

A5判並製・二〇〇頁／定価 二、二〇〇円【電子版あり】

万博学研究会編

万博学／Expo-logy

第2号

【特集 万博と冷戦】

A5判並製・二二〇頁／定価 二、二〇〇円【電子版あり】

【予定目次】

【特集 大阪万博前後の世界】

カナダ史と万国博覧会―モントリオールと大阪にみる脱自治領化と脱植民地主義の表裏
沖縄国際海洋博覧会と平和祈念公園の成立―大濱信泉と稲嶺一郎の活動から

(鈴木健司
君島彩子)

【対談「昭和四〇年代論」の可能性―大阪万博前後の社会相

(福岡良明×飯田恵
能勢和宏)

国際博覧会における欧州共同体の「結集」―沖縄（一九七五）・ノックススウィル（一九八二）・つくば（一九八五）・バンクーバー（一九八六）博覧会を中心に

高松宮と万国博覧会―戦後の皇室外交におけるブリュッセル万国博覧会をめぐる

(牧原出)

万博の日本館から見える展示映像アーカイブの意義―保存されない映像

コラージュ カレンダーにみる二〇一〇年上海万博

コラム 朝日放送と一九七〇年大阪万博

魁の人・清川惣助と博覧会―新都・東京で開いた七宝の新機軸

万国博覧会と帝国主義

(脇山真治
中牧弘光
鈴木崇司
武藤夕佳里
井上章一)

★第3号刊行記念シンポジウムのご案内★

公開シンポジウム「万博学／Expo-logy万国博覧会の戦後世界史」を開催。

二〇一四年十二月七・八日@グランフロント大阪北館8階ナレッジキャピタル

詳細は、万博学研究会HP、小社SNS等でお知らせいたします。

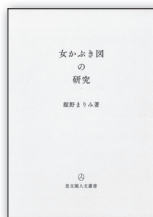
論集『万博学―万国博覧会という世界を把握する方法』で打ち出した「万博学」という研究視角の、さらなる共有と深化をはかるため、最新の成果を毎年発信。創刊号では戦後の万博と植民地の関係の特集。万博はいかにして現在の姿になったのかという問いに、植民地を切り口にして迫る。

特集では、「万博とは世界を映す鏡である」という万博学の立場から、ブリュッセル（一九五八年）、モントリオール（一九六七〇年）、大阪（一九七〇年）など冷戦期に開催された万博と東西陣営とのかわりを論じる多様な角度の論考で、万博に映った冷戦の時代を活写する。

館野まりみ著

女かぶき図の研究

【思文閣人文叢書】



A5判上製函入・三四八頁／定価 七、七〇〇円

伊東史朗（京都国立博物館名誉館員）著

神像の研究Ⅱ



9月刊行

B5判上製・三三六頁／定価 二二、一〇〇円

伊東史朗著

神像の研究



B5判上製・三四四頁／定価 二二、二〇〇円

お国によって始められたかぶきは、その後、遊女たちによって模倣され、十七世紀初頭の京都を中心に地方に広がった。近世の幕開けとともに絵画史に新しい画題やモチーフを提供することとなったお国や遊女によるかぶき―すなわち、女かぶき―は、どのような意味や役割を担って描かれたのか。同時代の鑑賞者はそれをどのように捉えたのか。まず、女かぶきの演目とその変遷の経緯を整理し、描かれた芸態の意味を読み解く。次に、女かぶきを取り上げる絵画の真の主題と制作意図や背景、絵師や注文主と鑑賞者を探り、さらに、次世代の婦女遊楽図とのつながりを示す。その上で、遊楽図再考に向けて試論を提示する。

二〇二二年に刊行した『神像の研究』に引き続き、著者が長年にわたり書き溜めてきた、神像に関する研究を集成する。従来まとまった研究の蓄積がなかった神像について、とくに仏教（仏像）との習合現象を扱う「神仏習合と本地垂迹説」に力点を置き、神像造立の思想的背景に迫る。

また、微細な神格として従来研究の対象にならなかった「門神・童子・動物表現」や、研究対象を芸能にまで広げる「師子頭と面」によって、神像史研究の領域の広さを示し、神像研究の進展に寄与することを試みる。

神像とは神の姿をあらわす彫刻であり、御神体として尊ばれてきた歴史から、直接人目に触れる機会が少ない。仏像に比べ知られている事例が少なく調査の機会も限られてきた神像の研究は、仏像研究に比して遅れを取ってきたと言わざるを得ない。本書は、そうした状況を打破するべく、神像研究の基礎を築き、神像史を日本彫刻史の一分野として確立する試みである。

河田昌之・赤澤真理・大口裕子・伊永陽子編

伊勢物語 造形表現集成

B5判上製・四三三頁(カラー二四〇頁)／定価 二七、五〇〇円

伊勢物語を題材とする絵画、書跡、工芸などの造形約一五〇点に焦点を当て、表現の多様性や創作の独自性を解説。雅な王朝文化の象徴である伊勢物語絵の受容のあり方に、造形表現の観点から迫る。

伊勢物語絵の専門研究者陣による総説と論考、伊勢物語絵を読み解くにあたつてかせない画題を個別に分析する「モチーフ集」、より広範なテーマを扱う「コラム」を収載。巻末には作品総覧・所蔵館情報などを掲載。

伊勢物語をはじめ、物語絵研究をこころざす入門者から専門家まで、必携の一書。

中世日本研究所編

無外如大尼 生涯と伝承

—中近世の女性と仏教

Mugai Nyodai: The Woman Who Opened Zen Gates

日英バイリンガル・B5判コデックス製・四四八頁／定価 四、九五〇円

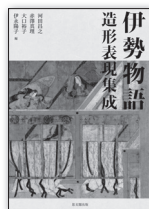


ジョン・ブリーン編

変容する聖地 伊勢

古代から近・現代にわたる論考一六編を収め、伊勢神宮の変容の歴史をひもとく。

定価 三、〇八〇円



「目次」

総説

伊勢物語と造形／伊勢物語受容年表(河田昌之)

図版解説

絵画(絵巻・色紙・宗達・光琳・抱一ほか／岩佐・土佐・住吉・狩野ほか／屏風・画帖・貝立／浮世絵／葉平像／版本・パロディー／かるた・合具)

書跡

古筆・写本

工芸

漆工／印刷／茶器・陶磁器／刀装具／染織／能面)

コラム

モチーフ集

モチーフからみる伊勢物語絵—その多様な背景—(大口裕子)

附録

技法・用語解説／主要参考文献／伊勢物語絵の主な舞台／作品総覧(英訳タイトル付)／所蔵先一覧

伊勢物語の造形表現の領域の拡がり―歌仙絵にみる在原業平像の造形イメージの形成から―(河田昌之)
近世染織資料における伊勢物語の意匠―現存小袖資料の八橋模様ほか―(伊永陽子)

女性と仏教の関係を考えるうえでもっとも重要な存在である無外如大尼。円覚寺開山・無学祖元の法を嗣いだ高僧であり、後世の尼僧たちに多大な影響を与え、今なお京都の尼門跡寺院がその法灯を継いでいる。
如大尼の生涯八百年を記念して、日・米の研究者が謎多き無外如大尼の出自や人物像を明らかにし、女性史・仏教史の新たな研究成果として日本語・英語、完全バイリンガルで紹介する。初掲載となる貴重な資料を多数オールカラーで収録。

伊勢物語絵研究会編

住吉如慶筆 伊勢物語絵巻

絵巻全体の構成や場面解説および解釈の最新研究成果を提示。

定価 三〇、三六〇円

表示価格は税込

川崎博著

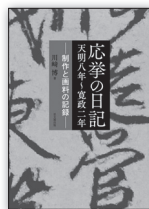
応挙の日記

天明八年〜寛政二年

制作と画料の記録

7月刊行

B5判上製・二三頁／定価五、五〇〇円



応挙の画料はいくらだったのか？

近世の京都絵師、円山応挙（一七三三〜一七九五）が残した、天明八年八月一日から寛政二年九月六日までの制作の記録が、屏風に仕立てられた形で発見された。「制作日誌」とも呼べるその内容からは、注文や画料の授受といった絵師の日常的なやりわいから健康状態、人間関係、制作実態、さらには当時の二朱銀の流通状況なども読み取れ、応挙研究のみならず、経済史料としても高い価値を有する。

並木誠士（京都工芸繊維大学教授）著

近代日本における

「絵画の変」―洋画の

流行からデザインの導入まで

今冬刊行予定

A5判上製・約四三三頁／定価 未定

明治維新を契機に、日本絵画には重大な「転換点」が訪れた。それは、たんに絵画の新技術としての洋画の輸入に留まらず、美術館の出現や近代的な展示方法による鑑賞場の変化や、裸体画・戦争画といった新しい画題の登場、あるいは絵画的な装飾が施された伝統産製品の輸出振興を目論む産業界の動向など、多岐に渡るものであった。こうした絵画をめぐるさまざまな変化は、相互に関連し合い、また、それぞれが伏流のようなかたちで結びついてもいる。本書では、従来の絵画史研究では等閑視されがちであった、新都・東京に対する古都・京都の動向、ならびに洋画からデザインへの展開というふたつの軸を設定したうえで、これら近代日本における絵画をめぐる変化を「絵画の変」と捉え、当時の資料を繙きながらその様相を明らかにしてゆく。

廣田孝著

二〇一三年度 意匠学会賞 受賞

竹内栖鳳と高島屋

―芸術と産業の接点―

A5判上製・三三六頁／定価一〇、七八〇円



「何が京都画壇に近代化をもたらしたか」という問いに対して、従来の研究では、竹内栖鳳の渡欧（一九〇〇年のパリ万博視察）が重大な契機であったと語られてきた。本書は、高島屋史料館が保管する輸出向け染織品の下絵など関連資料を駆使して、栖鳳が渡欧以前に高島屋画室において行った活動を復元し、画室における下絵制作の実践こそが栖鳳の画風を進化させ、京都画壇の近代化を導いたということを明らかにするものである。

並木誠士編

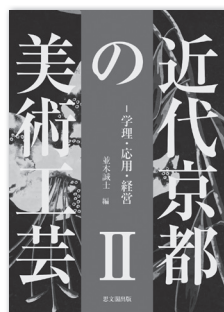
近代京都の 美術工芸Ⅱ

—学理・応用・経営—

7月刊行

A5判上製・六〇八頁／定価

13111006E



幕末の開国以来、美術工芸をめぐる状況は急速に近代化を遂げる。それは現在の「芸術」のもつ流通イメージとは異なり、輸出振興や産業の活性化と密接に結びついた様相を示していた。

本書の舞台となる京都でも、美術工芸をめぐりつぎと新しい動きが勃興する。しかし京都の動きは必ずしも中央政府の動向と連動しているわけではなく、地場の人びとの牽引により、独自の近代化路線を模索していた。これを京都の革新性と捉えることもできるが、しかしそれは同時に、天皇の東幸という「事件」からいかに立ち上がり、前近代から受け継がれてきた伝統産業といかに折り合いをつけるかという苦節の道程でもあった。

そうした京都特有の時代状況下で展開した近代美術工芸の世界を、「学理」すなわち当時最新の化学知識の導入と、その伝統工芸への「応用」、そしてそれらの制作者をとりまく場の「経営」という3つの観点から、総合的に描き出すことを試みる。

【目次】

はじめに

第Ⅰ部 学理と応用

京都の美術工芸の近代化と化学者・中澤岩太
染織産業における学者の貢献―大正期の京都高等工芸学校教員の業績に注
目して―
日本式ジャカード織機発展の歴史とその独自性
甲斐荘楠音〔舞ふ〕をめぐる―水木要太郎「大福帳」の所見から
寿岳文章と向日庵本の時代

第Ⅱ部 美術工芸と場

京都宮崎タンス店の取り組み―婚儀道具研究会
京都の七宝業―近代七宝の技法と製作環境を読み解く
国画創作協会のパトロング田忠三郎―大正期の京都画壇へのパトロネージ
をめぐる―
京都市立絵画専門学校の教職員
京都市美術工芸学校的女子卒業生耕山細香について
教材としての石膏像―京都工芸繊維大学所蔵資料より
表装界が迎えた近代―京都表具業組合誌『美演界』を読む
明治時代外国人貴賓の京都訪問と美術工芸商
京都商品陳列所による外国品収集
京都大毎会館における「日本民芸品展覧会」の意義―京都ではじめて開催
された民芸品の展覧会
《五条坂南側町並散華の図》を読む―伊吹弘による鎮魂

第Ⅲ部 図案と絵画

図案の語義と概念の展開に関する研究―明治期の美術・図案雑誌を中心と
して―
染織意匠としての百合―明治期の図案資料を中心に
室内装飾のための図案―明治後期から大正期の花鳥図案と京都画壇
『小美術』と谷口香嶠、浅井忠のかかわり
菊池素空の生涯と芸術
醜い美人―国画創作協会の美人画と岸田劉生《麗子像》シリーズ―前川志織
あとがき／索引／執筆者紹介

(並木誠士)

(並木誠士)

(青木美保子)

(上田 香)

(國賀由美子)

(高木博志)

(下出茉莉)

(武藤タ佳里)

(上田 文)

(松尾芳樹)

(田島達也)

(和田積希)

(多田羅多起子)

(山本真紗子)

(三宅拓也)

(原田喜子)

(木立雅明)

(岡 達也)

(岡 達也)

(井戸美里)

(大平素緒子)

(前崎信也)

(前崎信也)

(前川志織)

表示価格は税込

平川信幸著

琉球国王の肖像画

「御後絵」と

その展開

B5判上製・二五六頁十口絵二八頁／
定価 一三、二〇〇円

琉球絵画は、その歴史と同じように独自の輝きを放っていたが沖縄戦によって多くの作品が失われた。今日、残されている琉球絵画の作品は、日本や中国、韓国など東アジア諸国との交流の中で展開した作品群の一角でしかない。その研究は、辛うじて残った断片を手掛かりに、作品の存在を証明していくことから始めなければならないのである。

本書は、琉球絵画の中でも、国王の肖像画「御後絵」や「片目地頭代（喜久村繁聡）画像」など数々の名作が描かれた肖像画に焦点をあて、現存する作品だけでなく戦前に撮影されたガラス乾板や豊富な文献資料によって、その描写的特徴や様式の変遷などの考察を行った、琉球絵画史上初の体系的叙述である。

木村可奈子著

東アジア多国間

関係史の研究

—十六—十八世紀の国際関係—

A5判上製・三〇八頁／
定価 六、六〇〇円

本書は十六—十八世紀の東アジアをフィールドに、直接的・間接的にかかわり合う各国の史料を駆使して、東アジアの国々の交渉の実態を描き出し、東アジアの多国間の関係を検証する。特定の国や地域の歴史にとらわれず、明清中国・朝鮮・日本・琉球・シヤムの事例を取り上げること、各国の「対外関係史」をベースにした東アジア国際関係史研究では見えてこない側面を浮かび上げらせる。

中島章章著

大航海時代の海域アジアと琉球

—レキオスを求めて—
海域アジアの全体状況、ヨーロッパにおける地理認識の変化、古琉球期の琉球王国の活動を多角的に解明。

定価 一〇、四五〇円

琉球船と首里・那覇を描いた絵画史料研究会編

琉球船と首里・那覇を描いた

絵画史料研究

大型図版で近世琉球の姿が
色鮮やかによみがえる。

定価 二〇、三五〇円

菊池誠一編

朱印船貿易絵図の研究

名古屋市情妙寺所蔵「茶屋交趾貿易渡海絵図」と、九州国立博物館所蔵「朱印船交趾渡航図巻」を多角的に分析。

定価 八、五八〇円

平尾良光・飯沼賢司・村井章介編

大航海時代の日本と金属交易

最新の鉛同位体比分析の成果から、日本の銅生産や金属流通、南蛮貿易の意義に新たな視角を提示。

定価 三、八五〇円

石川九楊全作品集

ISHIKAWA KYUYOH:

THE COMPLETE WORKS

全三冊・附冊



9月刊行

B4判変形上製・総約二二〇頁／定価 二二〇、〇〇〇円

書家・文学者という二つの側面から、書表現の可能性や日本語の在り方を追求してきた石川九楊（一九四五）。本書は一九六三年から二〇二三年までの間に制作された、現存作品または資料（写真、図版等）により確認可能なすべての作品を収録した。

「書は、筆と紙の間に生じる接触、摩擦、離脱による「筆蝕」^{ひつよく}の劇^{ドラマ}である」^{こと}を見出し、書表現の極限を追求し続ける制作者・石川九楊のすべてを収めた作品集。さらに充実したな附録、論考で、その多彩な表現や活動、魅力に迫る。（日・中・英語表記）

【予定目次】

はじめに 表現の永続革命―全作品集に寄せて

（石川九楊）

【作品】

一九六〇―七〇年代
一九八〇年代

歎異抄
良寛詩
徒然草
伊勢物語

一九九〇年代

葉隠

枕草子

源氏物語

二〇〇〇年代

孟千字文

二〇一〇年代以後

河東碧梧桐書／妻へ

【附録 二】

揮毫／書初（一九八五―二〇一三）

伊勢物語 帯・着物／十二月シリーズ

サイン集

【論考】

石川九楊 ―筆蝕の魅力

（高階秀爾）

筆蝕のドラマ ―石川九楊の世界

（建畠哲）

石川九楊のリゾームの世界

（ツベタナ・クリステワ）

【附録 二】

書の領域と表現の可能性

（石川九楊）

全著作目録 附・書影一覧

略年譜

印譜

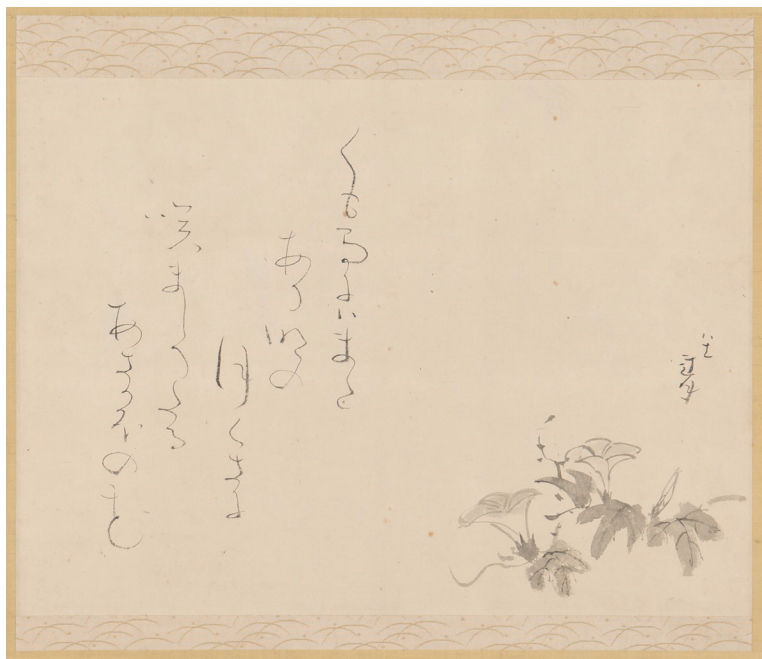
関連団体
個展・出品展覧会一覧

【別冊】

作品目録／索引

思文閣グループの
逸品紹介

美^びの 縁^{よすが}



朝顔^{あさがは}

大田垣蓮月

幕末から明治にかけて、当時を時めく女流歌人として名をはせ、書や焼き物でも人気を博した大田垣蓮月。西賀茂の神光院に暮らした晩年、八一歳の自画像賛である。賛は「雲間にはまだ有明の月草に咲きまじりたる朝顔の花」（海人のかる藻）秋部所収歌）。朝顔も露草も昼にはしぼんでしまうその儚さを詠まれることが多いが、蓮月の和歌はその花の美しく咲いている瞬間を切り取っており、彼女が夜明けのささやかな月明りに照らされる花を見た時の素直な感動が伝わってくる。

蓮月の書はその特徴として、連綿や変体仮名が少なく、本作での「あ」や「の」のように同じ字形を繰り返す。線の太さや墨の濃淡にも変化は少ないが、そのゆつたりとした運筆には伸びやかな爽やかさが感じられる。一方、筆の切り返しには鋭さが見られるが、これは蓮月焼の制作の際の土に字を彫りつける書き方の影響と思われる。大らかさの中に鋭い線が刻まれる蓮月の書風は、若くして家族を次々と亡くしてきた悲しみを乗り越えて、和歌や陶芸を通じて人生を心豊かに愉しんだ彼女自身に重ね合わせられ、人々の心を惹きつけている。



思文閣大入札会

ご売却を検討されているお客様の美術品を
求める方へとお引き合わせする、思文閣独自の入札会です。

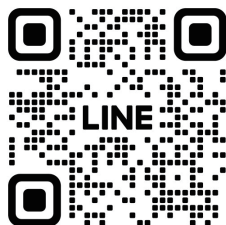


大入札会専用サイト

<https://sale.shibunkaku.co.jp>

※初めて利用される方は会員登録が必要となります。

思文閣大入札会 LINE 公式アカウント



大入札会に関わる情報発信のほか、
作品コンディション等をお問合せいただく
窓口としてご活用ください。

SHIBUNKAKU

思文閣

思文閣古書資料目録



源氏物語色紙屏風
六曲一双 (部分)

※古典籍を中心に古文書・古写経・絵巻物・古地図・
錦絵など、あらゆるジャンルの商品を取り扱っており
ます(年3回程度発行)。

※ご希望の方は、下記、思文閣出版古書部までお問
い合わせ下さい。

京都市東山区古門前通大和大路東入元町355

TEL (075) 752-0005 FAX (075) 525-7155

<https://www.shibunkaku.co.jp/kosho/>

kosho@shibunkaku.co.jp

自費出版のご案内

思文閣出版の自費出版レーベル

「Shibunkaku Works」

思文閣出版が培った学術書制作のノウハウを
活かして、ご研究の書籍化をお手伝いいたします。
詳細は小社までお問い合わせください。



京都市東山区古門前通大和大路東入元町355

TEL (075) 533-6860 FAX (075) 531-0009

<https://www.shibunkaku.co.jp/publishing/>

pub@shibunkaku.co.jp